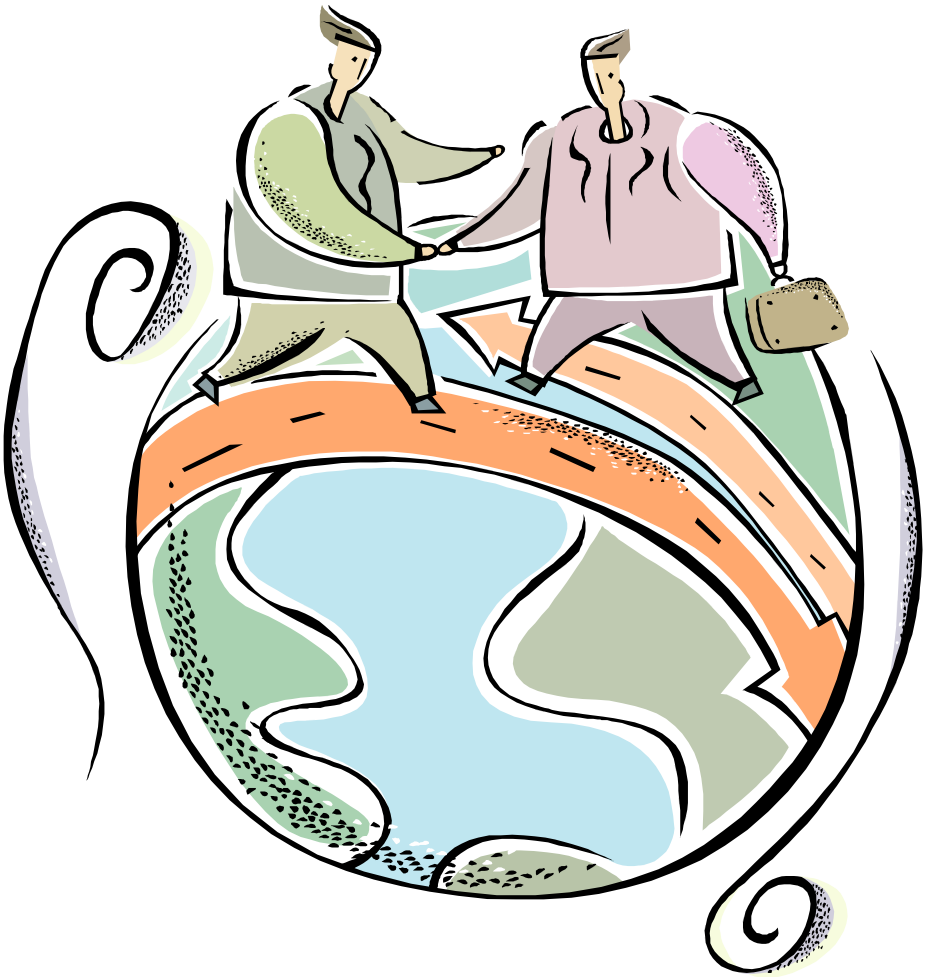
ＵＩＦＡ
20年間の歩み

The 20th Anniversary



浦安市国際交流協会

URAYASU INTERNATIONAL FRIENDSHIP ASSOCIATION

目　次

名誉会長あいさつ.....2
UIFA 創立 20 周年記念誌発刊にあたって.....3
浦安市国際交流協会（ＵＩＦＡ）２０年のあゆみ.....4
１　浦安市国際交流協会（ＵＩＦＡ）２０年史　年表.....4
２　UIFA 立ち上げから１０年間の主要な活動.....11
２．１　創世記の UIFA.....11
２．２　姉妹都市提携.....13
２．２　地域交流振興賞受賞.....16
３　最近１０年間の主要な活動.....17
３．１　ＵＩＦＡ自主独立体制への転換（対談）.....17
３．２　委員会活動から部会活動へ.....25
３．３　ＡＳＥＡＮ青年招待事業開始の経緯.....29
３．４　ＪＩＣＡ（国際協力機構）青年招へい事業への協力の経緯と経過.....31
３．５　姉妹都市交流事業の２０年.....39
３．６　ＵＩＦＡ創立記念事業および姉妹都市提携記念事業.....40
３．６．１　創立 10 周年記念事業.....40
３．６．２　創立１５周年記念事業.....41
３．６．３　創立２０周年記念事業.....42
３．６．４　姉妹都市提携１０周年記念事業.....44
３．６．５　姉妹都市提携１５周年記念事業.....45
３．７　浦安市の国際化の取り組みについて.....46
４　UIFA 部会活動の歩み.....49
４．１　言語学習部会.....49
４．１．１　外国語学習講座.....49
４．１．２　日本語学習支援教室.....53
４．２　文化交流部会.....55
４．３　姉妹都市交流部会（友好の翼事業）.....57
４．４　総務・研修部会.....61
４．４．１　総務・研修部会の活動.....61
４．４．２　総会記念講演会.....62
４．４．３　イヤーエンド シンポジウム.....63
５　その他の活動.....65
５．１　その他講演会.....65
５．２　ホームステイの記録.....68
５．３　他の協会訪問等の記録.....70

名誉会長あいさつ

浦安市国際交流協会設立20周年を祝して

浦安市長　松　崎　秀　樹

このたび、浦安市国際交流協会(UIFA)が設立20周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

これもひとえに歴代の会長並びに徳田会長をはじめ、会員皆様方の御尽力の賜であり、ここに敬意と感謝を表する次第です。

設立からの20年間、「いま、世界はお隣どうし」を合言葉に、本市国際交流の中核的な団体として、幅広い活動を展開しています。市民に外国語を学ぶ機会を提供する外国語講座、外国人のための日本語クラスの開催、留学生との交流や日本文化･外国文化を紹介する文化交流、姉妹都市であるアメリカ合衆国フロリダ州オーランド市との姉妹都市交流など多岐にわたった活動をされ、市民の間にしっかりと根をおろし発展を続けています。

浦安市の人口は15万7千人を超え、外国人市民の人口も約3,200人を数え、県内でも外国人居住者数の割合が高い都市となっています。

こうしたなか、本市が多文化共生のまちづくりを推し進めるうえで、浦安市国際交流協会の果たす役割は非常に大きいものと認識しています。

今後も21世紀にふさわしい魅力ある国際都市浦安を築くために、皆様方の一層の御尽力、御協力をお願い申し上げますとともに、浦安市国際交流協会のますますの御発展と会員の皆様の御活躍を心から祈念申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

UIFA 創立 20 周年記念誌発刊にあたって

浦安市国際交流協会会長　　徳田　八郎衛

明確な中期計画を持たないのが裏目となり、浦安市国際交流協会創立 20 周年記念事業の実施を運営会議で決定したのは、もう 2006 年の新春も過ぎた頃でした。新年度総会準備の作業が迫る中、急遽策定した幾つかの記念事業の中で、人目につかない一番地味なのが、この UIFA 創立 20 周年記念誌制作であります。だが確実にモノとして、また情報として後世の会員に引き継げるのは、この小冊子だけでしょう。

「UIFA10 年間の歩み」作成の頃との大きな違いは、IT の進歩と数々の電子保存媒体の登場です。そのお陰で、紙の媒体では経済的にも不可能に近かった、過去の広報紙全部の全頁を記録・保存・配布するという、信じられないようなことも可能となりました。

また、「UIFA 5 年間の歩み」や「UIFA10 年間の歩み」に創生期の重要な出来事は、すべて収集されていますが、今回は、感想や感慨を中心に据えることはせず、生じた事実を正確に時系列順に記載した上で、それが生じた事由を説明しました。また、大きな変革があった場合には、どのような必要性があったか、どのような抵抗があったかを当事者に率直に記して頂き、最近入会された会員にも理解してもらえるようにしました。

世の変化のテンポは速く、新しいニーズが押し寄せる中、次の改革を前にして、本誌が単なる過去の記録ではなく何らかの教訓を我々に与えてくれるならば、望外の喜びであります。制作に当たられた方々の努力と献身に感謝します。

浦安市国際交流協会（ＵＩＦＡ）２０年のあゆみ

１　浦安市国際交流協会（ＵＩＦＡ）２０年史　年表

年月日		UIFA のあゆみ
1986	11 月 28 日	**（仮称）浦安市国際交流協会の設立懇談会**が開催され、協会設立の具体的な内容について協議された。
1986	12 月 22 日	**第１回（仮称）浦安市国際交流協会設立発起人会**が開催され、設立趣意書（案）・協会規約（案）・会員募集手続（案）・事業計画（案）について協議を行った。
1987	1 月 23 日	第２回（仮称）浦安市国際交流協会設立発起人会が開催され、設立総会に向けて協議を行った。
1987	2 月 20 日	**浦安市国際交流協会設立総会**を開催し、設立趣意書・協会規約・会員募集手続・事業計画を決定した。 会長には浦安市教育委員会委員長の浜野久雄氏、副会長には、北村守昭、辻村聖子氏が就任した。
1987	3 月 30 日	**浦安市国際交流協会設立記念国際理解講座開催** 「外から見た日本」のタイトルで上智大学教授　グレゴリー・クラーク氏の講演会開催
1987	7 月 4 日	**第１回総会開催**　浦安市文化会館小ホール 役員の互選、ならびに以下の専門委員会を設立した。 総務委員会　広報委員会、比較文化研究委員会、在住外国人交流委員会、帰国子女委員会、都市交流委員会、ホームビジット委員会、語学研修委員会、講演・シンポジウム委員会　なお、**会長は浜野久雄氏、副会長には、北村守昭、辻村聖子氏が選任された。**
1987	7 月 10 日	比較文化研究委員会の活動開始 比較文化研究委員会主催で、「浦安を知ろう・バスツアー」を実施、その後 7 月 11 日、8 月 19 日、9 月 19 日に実施した。 比較文化研究委員会では、このほか、「料理研究と食べ歩き」、「染色」、「手芸研究」、「英米 JOKE 研究」、「陶芸の土器作り」、「茶道研究」等など多岐に亘る活動を開始した。
1987	7 月 18 日	帰国子女委員会活動開始 「英語教室」、「ミニ講演会」、「社会見学」、「情報提供・学習会」、「ポットラックパーティー」、「会報誌“世界の国からハロー”発行」を中心に活動を開始した。
1987	7 月 26 日	第１回姉妹都市候補都市勉強会 この後、8 月２３日、9 月 27 日、10 月 25 日の４回にわたり、米国、カナダ、オーストラリアの１０都市を候補に勉強会を実施した。
1987	8 月 12 日～14 日	**ハワイの少年野球チーム受け入れを支援** 浦安シニアチームとの親善試合のために来日したハワイ少年野球チームのホームステイ、歓迎会などの受け入れ準備を支援し、当日は通訳支援を行った。
1987	9 月 20 日	**学生委員会発足** 浦安を訪れる学生や、明海大の留学生と一緒に交流活動を行う目的で、学生委員会が発足した。

1987	9月20日	語学研修委員会11言語・18講座でスタート。第1期参加者は、256名。
1987	11月23日	**JICA住環境研修生12名が初のホームビジット**
1987	12月5～6日	**外務省招聘日本語研修生6名が初のホームステイ**
1988	2月	**姉妹都市にオーランドを推薦** 理事会にて、都市交流委員会が姉妹都市の選定について、第1候補としてオーランド市、第2候補としてオーストラリア　ウォーロンゴング市を推薦。
1988	2月19日～21日	アジア学生文化協会受け入れの漁業研修生13名がホームステイ （以下ホームステイについては**5.2 ホームステイの記録**を参照してください）
1988	3月２１日	語学研修委員会　「第２回語研パーティー」受講生と講師による語学研修成果発表会。以後毎年実施されている。
1988	4月30日	**第２回総会**（文化会館小ホール）150人 浜野会長、北村副会長は留任、辻村氏は浦安市国際交流課長に就任のため、大塚満子氏が副会長に選任された。
1988	7月21日～28日	**姉妹都市候補オーランド市にUIFA公式訪問団を派遣。** 浜野会長、小林、徳田交流委員長、辻村　市国際交流課長の４名をオーランド市に派遣した。
1988	１２月４日	ミニトークとイヤーエンドパーティー（文化会館　155名）
1989	4月7日	**オーランド市長他が浦安公式訪問「90 年３月末までに姉妹都市提携の調印を行う」ことを主旨とする覚書を熊川市長と交換**
1989	5月13日	**1989年度（第３回）総会**（文化会館小ホール　250人） 会長は医師会出身の浜野氏が再選。副会長には、大須賀　稔氏、日比野　介彦氏が選出された。
1989	10月23日	**オーランド市にて姉妹都市提携調印式** オーランド市と浦安の姉妹都市提携は23日オーランド市役所に於いて、熊川浦安市長と、フレデリック・オーランド市長によって調印された。
1988	12月10日	イヤーエンドパーティー＆シンポジューム
1990	1月27日	**浦安市にて、姉妹都市提携調印式** 文化会館にて、熊川浦安市長とグレンダ・フード市議会議員・市長代行が姉妹都市協定書に調印した。
1990	3月	ＵＩＦＡパンフレットを浦安市内の全戸に配布した。
1990	5月12日	**1990年度（第４回）総会**（文化会館　250名）　会長、両副会長は留任
1990	6月7日～7月4日	**オーランド市Dr. フィリップス高校生ホームステイ受け入れ**
1990	8月31日	国際協力事業団が招へいした23名のシンガポール青年指導者と交流（UIFA，浦安青年会議所、浦安ロータリークラブ）
1990	12月2日	イヤーエンドパーティー＆シンポジューム

1990	12月23日～ 1月3日	浦安市中高生15名オーランドへ派遣。帰路首都ワシントンDCの見学実施
1991	1月27日	姉妹都市提携1周年記念懇親会（文化会館）　80名
1991	3月15日	**平成2年度国際交流基金地域交流振興賞受賞** 地域に根ざした草の根の国際交流が認められ地域交流振興賞を受賞。
1991	5月 8 日～ 16日	東京ベイシティ浦安ハーフにオーランドランナー3名が招聘された。
1991	5月11日	**1991年度（第5回）総会**　文化会館　250名 浜野会長（再任）、副会長　日比野介彦氏（再任）、梅原祥子氏（新任）
1991	7月29日～ 8月9日	浦安市中高生20名がオーランドへ派遣
1991	10月5日	**UIFA創立5周年記念「国際交流フェスティバル」開催** 文化会館小ホール　450人
1991	11月17日～ 24日	**第1回友好の翼オーランド市を訪問**　市民37名とUIFAから団長として浜野会長ほかに随行員として2名。事務局から2名、合計 42 名が参加した。この事業はＵＩＦＡが市からの委託を受けて企画実施したもの。
1991	12月3日～ 10日	フロリダ・シトラス・ハーフに市民ランナーが4名派遣
1991	12月14日	イヤーエンドシンポジウム&パーティー
1992	5月9日	浦安市の留学生との交流　（サンルートプラザ　250名） 浦安ライオンズクラブとUIFA共催
1992	5月23日	**1992年度総会**　文化会館小ホール　200名　　会長、両副会長　留任
1992	11月21日～ 29日	第2回友好の翼　37名
1992	12月5日	イヤーエンドシンポジウム&パーティー
1992	12月5日	**UIFAシンボルマーク決定**
1993	3月13日～ 27日	**第1回アセアン青年招へい事業開始** 国際交流基金地域交流振興賞受賞記念事業として、東南アジアで日本語を学ぶ学生を招聘し、日本への理解と友好を深める事業を行うこととした。
1993	5月22日	**1993年度総会**　鉄鋼会館　250名 会長　浜野久雄（再任）、副会長　梅原祥子（再任）藤岡順次（新任）
1993	6月10日～ 20日	ドクターフィリップス高校生20名ホームステイ受け入れ
1993	9月11日～ 19日	第3回友好の翼　40名
1993	11月20日～ 12月5日	第2回アセアン青年招へいプログラム実施

1993	12 月 4 日	イヤーエンドシンポジウム&パーティー
1994		**姉妹都市提携 5 周年記念事業として、Dr.フィリップス高校へ日本語補助教師を派遣。** 澤田美希子さん（4 月 15 日～5 月 24 日） 大槻順子さん（11 月 19 日～12 月 10 日）
1994	5 月 21 日	**1994 年度総会**　浦安鉄鋼会館 会長、両副会長　留任
1994	9月3日～18日	第 3 回アセアン青年招へいプログラム
1994	9 月 21 日～28 日	第 4 回友好の翼　39 名 Dr.フィリップス高校で「浦安デー」を開催。
1994	11 月 26 日	イヤーエンドシンポジウム&パーティー
1995	2月7日～14日	**姉妹都市提携 5 周年**をオーランドで祝うために、会長他 UIFA 役員 6 名がオーランド市訪問。
1995	５月１３日	**1995 年度総会**　浦安市集合事務所 301 会議室　150 名 会長　浜野久雄（再任）　副会長　藤岡順次（再任）、大森洋子（新任）
1995	5 月	**日本語指導ボランティア活動開始。**在住外国人交流委員会の中に日本語指導ボランティアのセクションを設け、活動を開始した。
1995	８月 26 日～9 月 10 日	第 4 回アセアン青年招へいプログラム
1995	9 月 13 日～20 日	第 5 回「友好の翼」47 名
1995	11 月 21 日～27 日	Dr.フィリップス高校生 10 名ホームステイ受け入れ
1995	12 月 2 日	イヤーエンドシンポジウム&パーティー
1996	5 月 18 日	**1996 年度（創立 10 周年記念）総会**　浦安市文化会館 会長　副会長　留任 **UIFA 創立 10 周年事業を行う。**
1996	9 月 4 日～12 日	第 6 回「友好の翼」38 名 　浦安太鼓潮桴連が同行
1996	10 月 27 日	**UIFA 創立 10 周年記念事業開催「浦安国際交流の集い」開催**
1996	12 月 8 日	**UIFA 創立 10 周年記念イヤーエンドパーティー**
1997	5 月 17 日	**199 7 年度総会**　鉄鋼会館 会長　両副会長　再任 規約変更　7 条（役員の選任）役員の被選挙人の資格変更、 　　19 条（委任）委任の手続き
1997	5 月 10 日～26 日	第 5 回アセアン青年招へいプログラム
1997	9 月 22 日～	第 7 回「友好の翼」41 名

	30 日	
1997	11 月 25 日	Dr. フィリップス高校生 13 名来日。市教育委員会主体で中高校生との交流
1997	12 月 6 日	イヤーエンドシンポジウム&パーティー
1998	1 月 17、18 日	**第 1 回国際交流フェスティバル開催**。以後毎年「浦安国際交流・協力フェスティバル」の名称で開催されている。
1998	3 月 13 日	**浜野会長逝去**
1998	5 月 16 日	**1998 年度総会**　浦安市文化会館 役員交代　会長　藤岡順次（新任）、副会長　醍醐　敦（新任）、大森洋子（留任）
1998	5 月 30 日～ 6 月 13 日	第 6 回アセアン青年招へいプログラム
1998	9 月 23 日～ 10 月 1 日	第 8 回友好の翼　45 名
1998	12 月 13 日	イヤーエンドシンポジウム&パーティー
1999	5 月 15 日	**1999 年度総会**　浦安文化会館　会長、両副会長　再任
1999	6 月 5 日～ 20 日	第 7 回アセアン青年招へいプログラム
1999	9 月 10 日～ 12 日	**都市交流委員会委員長他 4 名で台南市訪問中華民国国民外交協会（民間団体）等を訪問し、今後の交流活動について話し合った。**
1999	11 月 12 日～ 26 日	**姉妹都市提携 10 周年記念週間**
1999	11 月 17 日～ 22 日	**ユースアンバサダー**：姉妹都市提携 10 周年記念事業の一つとして、オーランド市ジョーンズ高校から３名の「ユースアンバサダー」を招聘した。
1999	11 月 20 日～ 21 日	**姉妹都市提携 10 周年記念式典**：友好の広場記念式典会場にて、オーランド市から来訪した市長代行以下１３０名と、浦安市民数千人が参加して記念プログラムを終了した。
1999	12 月 4 日	イヤーエンドパーティー
2000	2 月 4 日	**オーランド訪問団　市長を代表する 193 名の訪問団結成。内友好の翼は 100 名**
2000	5 月 20 日	**2000 年度総会**　浦安市文化会館 会長、両副会長　留任
2000	8 月 20 日～ 23 日	**青少年の台南市訪問** 市内の中学生４名と UIFA メンバー７名が青年交流の第１陣として 台南市を訪問。
2000	9 月 30 日～ 10 月 15 日	第 8 回アセアン青年招へいプログラム
2000	10 月 27 日～ 11 月 1 日	マレイシア日本語協会員の来訪　同協会代表エドワード・リー氏を団長と日本語を学ぶ青年 15 名の浦安訪問。ホームステイ(2001 年に再度来訪)
2000	12 月 16 日	ミレニアム・イヤーエンドパーティー　オリエンタルホテル 各委員会のパーフォーマンス紹介他　（青年会議所が特別参加）
2001	2 月 7 日～	第 10 回友好の翼　43 名

	14 日	
2001	5 月 19 日	**2001 年度総会**　浦安市文化会館 会長　藤岡順次留任、副会長　醍醐　敦留任、宮澤君子新任 規約改定：役員再任規定、三役の選出方法、運営理事の定義づけに関する規定の新設 **日本語ボランティア委員会を在住外国人交流委員会から分離新設**。
2001	9 月	**ユースアンバサダープログラム延期** 9 月 11 日におこった同時多発テロのため、3 月に延期
2001	9 月	**友好の翼　中止**
2001	10 月 3 日から 8 日	**ホームステイ in マレイシア** 5 名の会員がマレイシアの家庭にホームステイ
2001	12 月 22 日	**協会創立１５周年記念** アセアンフェアー　および　イヤーエンドパーティー
2002	2 月 17 日	**浦安ライオンズクラブ創立 30 周年　記念助成金受領**
2002	3 月 9 日～13 日	**協会創立 15 周年記念オーランド市ユースアンバサダー3 名の招待**
2002	3 月 16 日	**臨時総会** 浦安市国際化指針により、これまで市職員に全面的に頼っていた事務局機能をＵＩＦＡ自らの手で行うことになり、**一般の民間団体として独立**してゆくことになった。
2002	5 月 18 日	**2002 年度総会**　美浜公民館　大集会室 規約改正：**専門委員会を廃止し、言語学習部会、文化交流部会、姉妹都市交流部会、総務・研修部会の４部会制に変更**（13 条）その他の改正を行った。 役員：会長、両副会長　留任
2002	10 月 19 日	新組織の「部会」立ち上げ
2002	11 月 1 日～10 日	第 9 回アセアン青年招へいプログラム
2002	12 月 1 日	イヤーエンドパーティー
2002	12 月 21 日	**新組織の第一回「運営会議」開催**
2003	２月５日～13 日	第 11 回友好の翼　41 名
2003	5 月 17 日	**2003 年度総会** 会長　藤岡順次留任、　副会長　宮澤君子留任、　竹中睦裕新任 本年度から 4 部会制による活動を開始する。
2003	12 月 7 日	イヤーエンドパーティー　サンルートプラザ　180 名
2004	2 月 4 日～11 日	第 12 回友好の翼　30 名
2004	5 月 15 日	**2004 年度総会**　浦安市文化会館 アセアン青年招聘事業は終了し、今年度より JICA の主催する青年招聘事業の地方プログラムを受託することとした。

		会長竹中睦裕　新任、副会長宮澤君子　留任、吉村俊夫　新任 規約改正：会員資格に年齢 16 歳以上を追加。部会役員の任期を 1 期にする。その他の改正を実施した。
2004	8月1日公示	**姉妹都市 15 周年記念エッセイコンテスト** 浦安市　米田　喬氏、オーランド市　クリス&ジュリア・ダニエルズ夫妻が受賞
2004	9 月 14 日～21 日	**JICA 青年招聘事業地方プログラム**　マレーシア青年 22 名受け入れ
2004	10 月 16 日	**姉妹都市 15 周年記念フェスティバル**（市と共催）文化会館大ホール　200 名
2004	11 月 18 日～23 日	Dr.フィリップス高校生招待（**ユースアンバサダー**）2 名と引率イルマ・ステンマン
	12 月 5 日	イヤーエンドパーティー　東京ベイホテル東急　106 名
2005	2月9日～16日	**15 周年記念第 13 回友好の翼** 婦人の会から 19 名参加、合計 37 名
2005	5 月 14 日	**2005 年度総会**　浦安市文化会館 会長　竹中睦裕　留任、　副会長　徳田八郎衛、長坂桂子　両名新任
2005	5 月 16 日～31 日	JICA 青年招聘事業地方プログラム　フィリピン青年 23 名受け入れ
2005	5 月 17 日～24 日	**徳田副会長、長崎・佐藤姉妹都市交流正副部会長　オーランド調査のための出張** 世界遺産イベント、友好の翼派遣時期、その他の打ち合わせを実施した。
2005	11 月 3 日	**マリク理事、浦安市より表彰**
	12 月 3 日	イヤーエンドパーティー　オリエンタルホテル
2006	2 月 15 日～22 日	第 14 回友好の翼　24 名
2006	5 月 20 日	**2006 年度総会**　浦安市文化会館 会長　徳田八郎衛　新任、長坂桂子　再任、　山上晁子　新任
2006	7 月 17 日～25 日	JICA 青年招聘事業地方プログラム　バングラデシュ青年 15 名受け入れ
2006	11 月 19 日～25 日	Dr. フィリップス高校生 30 名浦安訪問 ホームステイ受け入れ講習会、京都ツアー、歓送迎会を支援
2007	１月２１日	浦安市国際交流・協力フェスティバル参加 国際子供交流フェスティバル（マーレ）
2007	３月１７日	UIFA２０周年記念事業　「異文化交流への誘い」
2007	３月３１日	シンポジウム　「在住外国人は何を求めているか」

２　UIFA 立ち上げから１０年間の主要な活動

２．１　創世記の UIFA

元姉妹都市交流部会長　徳田　八郎衛

１９８６年１１月２８日	（仮称）浦安市国際交流協会の設立懇談会が開催され、協会設立の具体的な内容について協議された。

浦安市国際交流協会設立の母体となったのは、既存の団体ではなく、1980 年代前半に始められた浦安市の「国際交流ボランティア」制度に登録していた個人の方々である。これは現在も活用されている「〇〇語を通訳します」と申告するボランティアであり、これの登録者に市役所から声がかけられ、1986 年 11 月に設立懇談会が発足した。

その呼びかけにあたったのは市長秘書課である。東京ディズニーランドが開園してから、国内だけでなく国外からの市役所訪問客は増える一方であり、秘書課も、それを支援する「国際交流ボランティア」も大忙しであった。また京葉線の開通を見込んで新浦安駅予定地周辺の整備が進み、外国人の居住者も増えてきたこともあって、行政サイドも市民サイドも、国際交流協会設立の必要性を切実に感じるようになっていた。

このような背景を反映して、この設立懇談会は直ちに 12 月の設立発起人会となり、さらに翌年 2 月の設立総会にまで発展する。会長には市教育委員長の浜野久雄氏が選出されたが、教育委員会の意向や希望はまったくなかった。「専門委員会」という名称が多用されるなど、議会や教育委員会の規則や呼称が当協会の組織や会則に取り入れられているのは、設立発起人たちの選択によるものである。

1987	7 月 4 日	第１回総会開催　浦安市文化会館小ホール 役員の互選、ならびに以下の専門委員会を設立した。 総務委員会　広報委員会、比較文化研究委員会、在住外国人交流委員会、帰国子女委員会、都市交流委員会、ホームビジット委員会、 語学研修委員会、講演・シンポジューム委員会 なお、会長は浜野久雄氏、副会長には、北村守昭、辻村聖子氏が選任された。

1987 年４月から市役所に国際交流課が新設されて村瀬滋生課長、田代寿郎係長、松井千恵子課員の３氏が配属され、新生の協会は、強力な支援を受けることになり、協会の事務局も国際交流課に設置された。

まだ美浜公民館も開館していない時期であり、会議には富岡公民館と市文化会館が頻繁に利用された。７月 4 日の第１回総会が終わるや、各委員会の活動が一斉に始められたが、全体にかかわる大きな事業は、８月にハワイ親善野球チームの受入れであった。これは少年のチームであり、直接のパートナーは、浦安少年野球連盟であったが、ホームステイの受け方、歓迎会の準備や運営についても協会は準備講習などを行った。現在の活動と比較すると、通訳ボランティアとしての雰囲気や責任感がかなり濃厚であった。

ハワイ親善野球チームの歓迎会

当協会が、最初のホーム・ビジットを受入れるのは、同年 11 月の JICA 研修生である。住環境や都市開発を研修テーマとする JICA 招聘研修生を日本建築センターや住宅公団が受入れ、これに当協会が協力して先ず 12 名のホームビジットを受入れた。新旧市街地を比較しながら浦安を案内した。

JICA 研修生の清瀧神社見学

外務省日本語研修生

これに続き 12 月には外務省日本語研修生６名の１泊ホームステイを受入れる。

そして翌年 2 月、アジア学生文化協会に協力する漁業研修生 13 名のホームステイ受入れや４月のエルダーホステラー週末だけのホームビジット受入れに発展した。だが勤め人が多い当協会の会員には、JICA 研修生の一泊ステイが受入れやすく好評で永続きすることになる。そのコーディネーターとなったのは姉妹都市委員会に属する横堀肇会員であり、勤務する住宅公団において研修プログラムにも携わっていた。またゲストも交流を受入れ家庭とだけ楽しむのではなく、他の委員会が実施する座談会、交流会に半日参加したり、セミナー講師を務めたりもした。

若さと元気に溢れていた当時の協会を象徴する事業が、1988 年 8 月６日・７日に実施した、一般市民や在住外国人との合同富士登山である。八木敦子在住外国人交流副委員長が、採用間もない溝上澄人課員や松井課員の支援を受けながら 40 名を先導したが、山に置き去りとなる人もなく全員無事に下山した。これが唯一度の「霊峰富士で国際交流」となった。

だが間もなく、週末だけではない、長いホームステイも受けることになる。設立から翌翌年の 1989 年 8 月、フランスのモルレ市民 18 名が 3 週間も滞在した。協会員の家庭だけでは対応できず、団体会員、特に浦安ライオンズクラブ会員の家庭に協力をお願いして受け入れることができた。

協会懇談会発足の段階から、設立関係者は、この協会が「新住民」ばかりで構成する団体となってしまうのを危惧していた。その歯止め、あるいは中和策として、既存の様々な団体に「団体会員」として入会するよう働きかけた。その努力が実を結び、団体会員の協力によって 18 名の 3 週間滞在が可能となったのである。

このモルレ市民ツアーは、日本文化に興味を持つ人々の集まりであったが、日本語が話せるという人は少なかった。そこで「通訳ボランティア」としての協会員の意欲や能力が発揮される場面もたびたび登場した。

モルレ市民の合唱

エルダーホステラーのホームビジット

翌９月には、エルダーホステラーのホームビジットを要請された。これは大阪に日本支部を持つ、世界的なシニアーの旅行協会であり、年配者が気楽に宿泊できるようにという配慮で都内のホテルに宿泊しながら、浦安市のシニアーとの懇談を希望してきた。当協会は、ここでも「通訳ボランティア」としての能力を発揮する。また東京都近郊へのバスツアーにも同行した。その後、1995 年までエルダーホステラーのホームビジットは続くが、やがて東京よりは、歴史と伝統文化に満ちた地方都市での滞在や懇談を希望するようになり、浦安市への来訪は打ち切りとなった。

２．２　姉妹都市提携

編集委員会

１　都市交流委員会の発足と姉妹都市交流候補都市の調査

1987 年 7 月 4 日に開催された第１回総会にて九つの専門委員会の一つとして「都市交流委員会」が設立されました。委員会の名称を決めるにあたっては、世界のいろいろな都市と友好都市交流ができる委員会にすべきとの考えで「都市交流委員会」としました。

設立後直ちに姉妹都市交流の候補都市の勉強会を開催し、以後概ね毎月１回会合を開きました。

当時候補に挙がった都市は以下の１０都市です。

① 米国　フロリダ州　オーランド市
② 米国　テネシー州　メンフィス市
③ 米国　ミシガン州　マスキガン市
④ カナダ　ケベック州　ケベック市
⑤ オーストラリア　ニューサウスウェールズ州　ブルーマウンテン市
⑥ オーストラリア ニューサウスウェールズ州　ウォーロンゴング市
⑦ 米国　バージニア州　アレキサンドリア市
⑧ 米国　カリフォルニア州　アナハイム市
⑨ 米国　フロリダ州　カスミー郡
⑩ 米国　カリフォルニア州　サンタモニカ市

勉強会では、各地から送られてきたビデオや、大使館や図書館から入手した資料、あるいはメンバーの旅行情報などをもとに討論し、先方の事情なども調査しながら第１段階の絞り込みを行い、次の４都市が第２段階候補として残りました。

① 米国　オーランド市
② 米国　メンフィス市
③ 米国　アレキサンドリア市
④ オーストラリア　ウォーロンゴング市

２　交流都市選定基準の作成および候補都市の評価

当初、勉強会では、特別の選定基準がなかったために、参加者の間の意見が錯綜し、交通整理が大変困難でした。このため、14 項目の評価項目に３段階の得点と、重要度に応じたファクターを定めた交流候補都市選定基準表（右表）を 1987 年の 10 月に作成し、この基準により上記４都市の評価を行うことにしました。

この結果、上記4都市の得点は48点満点で、

① アレキサンドリア市　46点

② オーランド市　40点　　（右の表参照）

③ ウォーロンゴング市　38点

④ メンフィス市　32点

となりました。

オーランド市の評価

	CRITERION	3	2	1	R	x	W	T
1	都市の人口と広さ（人口密度）		○		2	x	2	4
2	地理的類似／WATERFRONT	○			3	x	1	3
3	近郊大都市のベッドタウン		○		2	x	1	2
4	新旧の入り混じった都市			○	1	x	1	1
5	レジャー観光都市	○			3	x	1	3
6	政治・産業のつながり／類似性	○			3	x	1	3
7	文化・スポーツの活発度		○		2	x	1	2
8	教育レベルの高さ	○			3	x	1	3
9	市民の勤勉度		○		2	x	1	2
10	言語のコミュニケーション	○			3	x	1	3
11	都市の治安度・政治の安定度	○			3	x	1	3
12	日本に対する興味度・親近度	○			3	x	2	6
13	日本よりの訪問のし易さ		○		2	x	1	2
14	気候と風土	○			3	x	1	3
						Total		40

この評価点とは別に、姉妹都市交流委員が個人的旅行あるいは業務出張を利用して候補都市への調査を行い、実情を入手いたしました。

評価得点トップのアレキサンドリア市については、当時の徳田委員長が仕事で現地に居住する同僚を通して、豊富な情報を入手し、アレキサンドリア観光協会とも接触を図りましたが、87年12月にアレキサンドリア市から、すでに3つの海外姉妹都市と交流しており、これ以上手を広げる意思がないとの回答があり、断念しました。

メンフィス市は、浦安に比べ、市の規模が大きすぎることと、全体に情報不足のため断念し、最終的に88年2月の理事会で、都市交流委員会から姉妹都市候補の選定について、第一候補にオーランド市、第二候補にウォーロンゴング市を推薦し、全会一致で了承されました。

このことは直ちに浦安市長に報告され、その後、浦安市国際交流課と、浦安市国際交流協会が協同して、第一候補のオーランド市に対し、姉妹都市の交渉を開始しました。

その後、第二候補のウォーロンゴング市が、川崎市と姉妹都市を電撃的に結んでしまったことにより、姉妹都市の対象はオーランド市に限定されてしまいました。

3　オーランド市との姉妹都市交渉経緯

1）1988年2月　野田委員が非公式訪問を行い、市長補佐官ジョー・ミテガー氏他と面談。

2）88年3月31日　オーランド市ビル・フレデリック市長あて、熊川市長の親書を手渡す。

3）88年4月1日　オーランド市ビル・フレデリック市長あて、浜野UIFA会長の親書を手渡す。

4）1988年7月　UIFAからオーランド市へ訪問団を派遣

5）1988年8月　オーランド市議会議員メアリー・ジョンソン氏が来日に合わせ、浦安訪問。

6）1989年1月　浦安市　鈴木助役他　オーランド市訪問

7）1989年2月　浦安市　市議会議員団　オーランド市視察

8）1989年3月　オーランド市議会議員　グレン・フォード氏の浦安訪問

9）1989年4月7日　オーランド市ビル・フレデリック市長が浦安を公式訪問し、姉妹都市提携の覚書を取り交わした。

4　姉妹都市提携の調印

1）1989 年 10 月 23 日　オーランド市にて姉妹都市提携調印式

浦安市から、市長、市議会議員、市民代表が参列して、熊川浦安市長と、ビル・フレデリック　オーランド市長との間で、姉妹都市協定書に調印した。

2）1990 年 1 月 27 日　浦安市にて、姉妹都市提携調印式

オーランド市代表団 10 名が来日し、オーランド市グレン・フォード市長代行と熊川浦安市長との間で、姉妹都市協定書に調印した。

浦安市国際交流協会を中心とした、姉妹都市提携がこの調印により無事終了し、その後の友好の翼事業に引き継がれました。

（UIFA 5 周年記念誌「UIFA 5 年間の歩み」（小林久良雄氏　記）をベースに書き直したものです）

オーランド調査の想い出

元姉妹都市交流部会長　徳田八郎衛

1988 年 7 月、姉妹都市第 1 候補のフロリダ州オーランド市へ当協会から 3 名、市役所から 1 名、計 4 名が地域調査および先方の感触打診に派遣されました。すなわち浜野会長、小林久良雄姉妹都市交流委員長、同副委員長の小生、そして協会副会長から 2 代目の市国際交流課長に就任して間もない辻村聖子さんです。文献調査や聞き取り調査で地域調査などできるはず？確かに TDL の開園前後から、少なからぬ地方自治体関係者や議員、そして企業関係者が浦安から当地を訪れています。また米国で宇宙開発に携わる私の知人も、オーランドについて懇切丁寧に説明してくれました。

だが百聞は一見にしかず、ある目的や任務を持って行くのと、そうでないのとでは大違いです。まず予想通りだったのは、UIFA に相当する組織がないこと。これは驚くには当りません。日本でも 1960 年代後半に続々姉妹都市提携が行われましたが、提携までに協会が結成されていたのは、むしろ少数です。国際交流・友好協会がない場合には、往々にして観光協会や商工会議所が姉妹都市交流の中核となります。オーランドも同様で、我々に会ってくれたのは観光協会や商工会議所の方々でした、その後も時々「オーランド市民が浦安を訪問」と報じられますが、実態は一般市民ではなく、これら団体の役員でした。残念ながら浦安では、然るべきパートナーが見つからなかった模様です。

様々な民間団体を表敬し活動を見学しましたが、当地の婦人の会にはつくづく感心しました。寄贈されたという古い木造家屋が本部でしたが、何と 45 歳定年制です。理由は、「高校を卒業した後、女性の半数近くが 20 歳前後に結婚するので、45 歳ぐらいになると孫ができる。孫の自慢話にウツツを抜かすようになると活動が停滞するから辞めてもらう」というものですが、青年会議所同様に、組織の若さと活力維持への配慮と受け取りました。

集まってワイワイ騒ぐだけでなく、離婚やアル中への助言も行っていました。生涯教育だの肥満防止だのという個人的な生活指導まで官に依存する、あるいは官が乗り出すという体質の日本と、できるだけ民が自主的に実施して大きな政府になるのを避けるという米国との違いを、この南部都市で実感することになろうとは、夢にも思いませんでした。

２．２　地域交流振興賞受賞

編集委員会

1991 年 3 月 15 日、浦安市国際交流協会はその活動が評価され、（財）国際交流基金から『地域交流振興賞』を受賞しました。

これは地域の国際理解に貢献し、国際親善を推進している団体や機関、個人に、同基金が昭和 60 年以来贈っているもので、UIFA の受賞理由としては、市民のボランティア活動によって国際交流事業が日常的に広範囲に行われていることや、新興都市でありながら住民がこの活動を通じて地域への愛着を深めている点が高く評価されたためです。

授賞式は 3 月 15 日午後、ホテルニューオータニで行われ、日比野副会長他 50 名の会員も列席する中、賞状と副賞 150 万円が鹿取康衛　国際交流基金理事長より（故）浜野会長に手渡されました。浜野会長は、「会員の皆さんの積極的な、そして、地味だが一過性ではなく継続性のある活動のお陰です。沢山のお金をかけて外国の人を集め、ドンと大きなイベントをやるのではなく、会員ひとりひとりの努力を積み上げてきたことが評価されて本当にうれしい」と感激もひとしおでした。

翌 1992 年から、アセアン諸国で日本に興味を持ち、日本語を勉強している浦安市に招待して日本への理解と友好を深めてもらう事業（ASEAN 青年招へい事業）を始めていますが、この資金として、このときの副賞 150 万円と浦安ライオンズクラブからの寄付金 250 万円が使われています。

国際交流基金（The Japan Foundation）

国際交流基金は、昭和 47 年、外務省所管の特殊法人として設立され、その後平成 15 年 10 月 1 日独立行政法人化されました。わが国に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進し、及び文化その他の分野において世界に貢献し、これにより良好な国際環境の整備並びに我が国の調和ある対外関係の維持及び発展に寄与することを目的としています。

主要な事業としては、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流、及び国際交流に関する調査研究・情報提供などです。

基金は自ら国際交流事業を行なうとともに、他団体、機関に対して資金援助を行なうことで、民間の国際交流に対して支援しています。

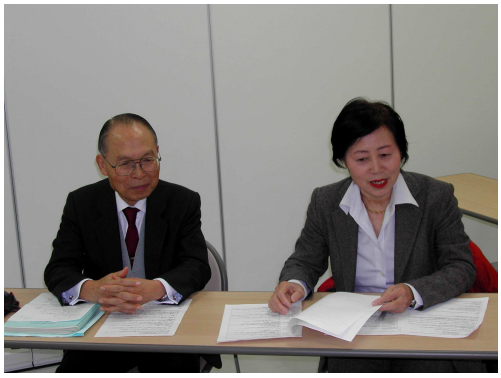
国際交流基金授賞式およびシンポジウム

３　最近１０年間の主要な活動

３．１　ＵＩＦＡ自主独立体制への転換（対談）

辻村聖子 元国際交流課長、　藤岡順次 元会長、　徳田八郎衛 会長
大野裕子 総務研修部会長、　本誌編集委員 三浦紘二（記録）

徳田　１５年間も国際交流課内に所在してきた事務局の独立についてお話し願いたいのですが。



辻村　その前に、初めになぜ国際交流協会が必要かということからお話します。実は市行政の仕事の中に国際交流というものも規定もありません。それは地方自治法の中に国際交流という規定がないからです。日本中どこの市町村にもありません。

国際交流というものは、市民の、心の中の問題です。市民交流は必要ですが、それに市が直接手を下すべきではないということで、国際交流協会というようなものが設立されてきたのです。そのバックアップは市が行うということでずっと進んできたわけです。ところが市に事務局があると、市にやってもらえばよいという依存心も生じ、その辺のバランスが難しいところでした。いずれは事務局を独立させ皆さんの手で進めていくべきだという考えは、最初からありました。それがずいぶん長くかかったということだろうと思います。

もっと早く独立していれば、もう少し財政的に豊かなときに独立が出来たのかなという気がします。

まだ課題はあります。場所の問題に関しても、今は誰も言わないから所在していますが、次の次の担当課あるいは市がどういうふうに見るかということになると、かなり課題はたくさんあると思います。

市民交流とは、もともと皆さんがやりたいことをやりたいように進めていくものですが、そこに外国人といつも交流できるという形になっていればいいなと思っています。

徳田　1987 年に創立されましたが、10 年経った頃から、独立の声が強くなったのでしょうか？その頃から私たちも、401 会議室をかなり使わせてもらうようになりました。

辻村　あそこを使うようになったきっかけも色々あります。実は国際交流課が出来て、はじめて市民が市役所の中で活動をするようになったのです。それ以前は市民が市役所の中へ入り込んで作業をするというようなことは全くなかったのです。市民は窓口まででした。そこで市役所自体もびっくりしました。市民が中に入ってきて、テーブルは囲む、お茶は飲む、作業はする。土曜も日曜もそこに来てやるという状況をドンドン作っていきましたから、やはり中では戸惑いもあったと思います。逆に認知度も高まったのですが、ただ役所の中は不便なところですから皆さんが活動するにはふさわしくないところでした。どこかに場所をとりたいという声が高まり、色々な理由をつけて市長と交渉し、時間制限とか色々ありましたが、取りあえず 401 会議室を活動の場として確保しました。

徳田　事務局が独立して移住する場所を確保しておいていただいたおかげで、事務局も独立できたような気がします。

辻村　結果的にはそうですね。

藤岡　もともと国際交流課が国際交流のために使うということで確保した部屋を我々がただ借りるということでした。

徳田　人口１２万くらいの小さい都市で、市役所から事務局が独立した都市は他にありますか？もっと人口の多

い都市でも、市役所の担当課に、おんぶに抱っこだと思いますが。

辻村　市町村の大きさはあまり関係なかったですね。小さな市でも出来ることは出来ます。もともと市がお膳立てして作った会ですから、市が応援しているというのは当然です。しかし、これほど高額な補助金を受けていた団体というのはあまり例がないかもしれません。

藤岡　千葉県の各市町村を調べたところ、やはり浦安は最高でした。一番多かった年ではASEANを含めて900万円ありました。

辻村　UIFAに直接助成した最高金額は、友好の翼を含めて1150万円でした。行政は初めになぜこんなに出せたかというと、国際交流を市民に対して継続的にやっていくために、ファンドが必要だということで、３億円の国際交流基金を作りました。ちょうど国際交流協会が姉妹都市交流を結ぶ時に作りましたが、毎年2400万円の利息が出ました。それで、そこから国際交流協会の補助金と外国人会への補助金、それに市民主体の姉妹都市交流への補助金が毎年出せたわけです。

利息が出なくなって、一体どうするのだということになり、一般財源から出すようになってきた時に、色々厳しいことが出てきたわけです。

徳田　当時は利回りが８％でしたから３億円あると2400万円になりますね。

辻村　はい、そのくらいだったと思います。それだけあれば、市の財政がどうなっても継続的に市民主体の国際交流が進んで行くだろうという考えのもとに３億円の基金を作ったのです。

徳田　正式に事務局が課から離れるのは、2002年ですね。

辻村　その前に国際交流課の中へUIFAのパートタイマーの事務員を置いたこともあります。それはまずい、ということが、事務局移転のきっかけにもなりました。

藤岡　2002年の臨時総会で団体としての事務局設置を正式に決めています。

徳田　事務局の独立と移転に当たって一番困られたのは何ですか？

藤岡　おんぶに抱っこでお世話になってきた運営委員会メンバーたちが、自分たちのことは、結局自分たちでするしかないと本気に考える意識改革が徹底していなかったことです。実はUIFA創設２～３年頃までは、運営委員会の案内も会議記録もすべて自分たちでやり、出席しなかった人たちには届けて回ったりしましたが、だんだん市役所にやってもらうようになり、そのうちにすべて市に頼むような形になってしまったのですね。始めは自分たちでやっていたのです。

もうひとつ大きいのは、ASEAN 青年招聘事業です。その当時は市の職員がはまり込んでやったのでうまく立ち上げられたのですが、これは大変な仕事でした。最後の８回目には、私も初めて実際に作業をやりましたが、これは相当な仕事だということが良く分かり、仕事量とお金の問題で完全独立後は続けていくことが難しいなという感じでした。それで今はASEANを止めています。

「将来は自主独立」というからには、いずれは補助金もかなり減らされると考えていたので、JICA のように費用を負担してくれる事業を取り込んではどうかということになったわけです。まあ、本当にそれで良かったかどうか反省していますが。

徳田　次に、思い切って４つの部会に絞り込んだ背景を当時の会長からお願いします。

藤岡　当初は、あれだけ多くの委員会が活動しましたが、委員会によっては、活動をやれないところも出てきていました。さらに、将来独立するということで、予算も補助金も減ることを考えてもやっていける事業かどうかという判断をして決めました。それからもうひとつは、熱心な会員の多い比較文化などのようなものを柱に

してほかのところは合併してもらいたいと言いました。止めてもらいたいとは言っていません。

またその問題を将来構想委員会に持ちかけて検討してもらいました。竹中さんなどに一生懸命検討していただき、最終的に４つのグループにまとめてきたので、これを運営委員会にかけて承認されたので、そのとおりになったわけです。やはり昔に比べれば相当な熱意を持って、UIFA の活動を推進しようとする人が、減ってきているのが現状です。　高齢化によって、私はもうやめたいという人が増えています。一方新しく入ってきて積極的にやろうという人が少ない。新しい人の確保といえば、外国語を習いたくて言語学習部会へ入った人や姉妹都市交流に参加した人の中から積極的な人を集めるぐらいしか人材補給の道が無くなってしまい、それも非常に限られた数でした。あとは部会自身で拡げてくれ、誘ってくれといったけど、実際には減る方が多く、新しく核になる人は本当にポツポツしかいなかった。だから、UIFA の力の現状ということも考えて、運営委員会で総会提案の方向でこれを承認したわけです。

徳田　よく分かりました。辻村課長がその当時、どのように見ておられたか聞かせてください。

辻村　一般会員が増えないということは認知度が非常に低いということです。もうひとつは浜野初代会長も言われたことですが、元の住民と新住民がどうやって付き合っていくかということ、それは国際交流と同じようなことだと思います。国際という枠はついているけれど交流が基本で、そこにすごい力を入れて何とか会員を増やそう、だから市職員のかなりの数が会員になり、市の主だった人は皆会員に、それを何とか教会につなげようと努力し、さらに新しく入ってきた住民とのつながりも大切にしていた。そういう努力が無くなったのはとてもさびしいことですね。

どうしても国際交流協会で一部の人だけが国際交流をやっているのではないかと見られがちなので、一生懸命、「そうではない」と言い続けてきました。しかし、そう見られるほど協会の存在感はあったのですが、今は逆に協会の存在が少し薄くなっているのかもしれないなと思います。国際交流に関心を持っている市民が全くいないわけではありませんし、過去にやっていた方々が協会を離れて、国際交流から縁が切れたかというとそうではないです。皆さん自分なりに交流を続けて、協会から離れてはいるけど、国際交流から離れたわけではないので、そこが協会の中に入って来られない何かわだかまりがあるというか、ジレンマみたいなところがあるのかなと思います。

交流とは、しょせん付き合いなのです。普段の付き合いの中にいろんな人が包容できるような雰囲気作りが一番重要かなと思います。

そういう意味で、委員会が少なくなったのはいいような悪いような気持ちです。

たとえば、言語について言えば、最初は１１言語２４講座有ったのです。そんなにたくさんあるのが良いか悪いかは別にして、結局人の出会いの場をたくさん作るということなのです。そのきっかけが協会だというような発想で、もう高齢者であれ、障害者であれいろんな人が語学に顔を出せるような雰囲気が大切だと思います。

このような交流の中で、根っこみたいな大事な箇所を丁寧にサポートし、周りの人が「やらなくてもいいんじゃない」というほどやることによって、その人と、それを取り巻く人と、さらにそれを大きく取り巻く人たちが変わってくるのが見えてきました。それが地域の国際交流だなと、今でも当時も思っていました。すごい数の場所取りを、公民館に対しても何に対しても、それが地域として生きてくために必要なんだということを説得し、納得させて、公民館から来るクレームも、とりあえず国際交流課で止めて、市民の皆さんがやっている活動の場所を確保しました。

以前は、そんなことがあったのですが、今は部会が少なくなり、皆さんその部会の専門家になってしまい、

そのため、つながりがもっと薄くなっていってしまった。では、入ってきた人が何をやるのか？ない。だから入らない。会員も減る。その人たちが「ありがとうございます」といって、毎回会費をもらいに行けば「何か僕も協会をサポートしているんだな」という気分になるけど、もう自動振り替え制度になったら「どうせ活動しない人だから、もういいや」となってしまう。

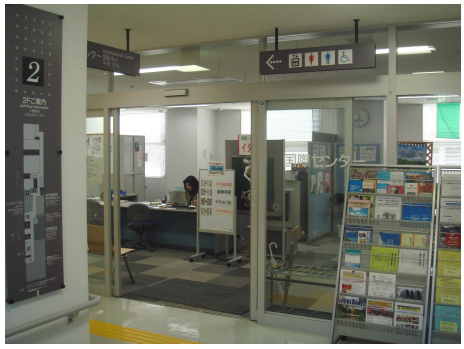
今、市の職員は何人入っていますかね。文化国際課は何人入っていますかね。また各団体の理事の方は入っているかもしれませんが、理事の所属団体の会員はどれくらい協会の会員になっているかな。おそらく以前の1/3、1/4に減っていると思います。そういう人たちのサポートがなんとなく有って、地域の国際交流があるのかなと思います。それを会員は何か活動していなければならない、こうあるべき、あああるべき　とルールを作ってしまうので、ゆるやかなサポーターだった人たちはみんなはじき出されてしまった。

徳田　確かに、活動資金を抑制しようとすれば、部会が少ないほうが楽です。たとえば月例会のお茶代、わずか800円くらいですが、部会が少ないと、それも減るわけです。ところが、少子化に悩む大学は、学生を集めるために、やれ国際何とか学科、やれ環境何とか学科と入り口をたくさん作っています。それに比べると、門戸が10もあったのに4つにするのは逆行のように感じました。

ところで、国際センターの構想はかなり前からあったのですか？

辻村　私が国際交流課長になった時点ではすでに、新浦安駅前に「仮称行政サービスセンター構想」が策定されており、その1フロアー全体が「国際交流センター」と位置づけてありました。しかし市民の国際交流はこれからスタートで、市民の間にはまったく認知されていませんでした。私はまず、活動が多くの市民の方々に知ってもらうには市内のすべての公共施設を利用し、皆さんの活動が目に見えるようにすることが必要だと思いました。行政は、まず「箱物」から、という発想だったのでしょう。

その後、駅前サービスセンターは「ウエーブ 101」がショッパーズ内に設置されたことで立ち消えになってしまいました。その後も度々「センター」構想は持ち上がり、さまざまな施設が検討の対象になりました。市民による国際活動であるUIFA/UFRAの活動も充実してきましたので、市役所の中に事務局があったり、あちこち分散して活動するのは不都合だと思い、「センター」の必要性を訴えました。ただ90年代末から世間の国際交流への風向きが変わり始め、「センター」への市の取り組みも変化しました。しかしここまで進んだ市民の国際交流活動を更に活発にするには拠点が必要であると思い、その必要性を訴えました。紆余曲折はありましたが、「交流」だけでなくさまざまな活動ができるよう「国際センター」と命名した拠点が完成しました。県内でも今後国際交流センターができるのはかなり難しいのが実情になってきていると思います。



国際センター（2007年開設）

徳田　創立の頃は、国際会館を建ててもらおうとさえ言っていましたからね。

辻村　実際にできたというのは浦安にとっては画期的だし、全国的に見ても画期的なことだったと思います。ですからこれからは、これをどういうように活用なさるかは皆さんの力ですけど、浦安のひとつの顔を作れたかなと思います。ここにくれば、お金もかからないし、市民一人一人が交流を、それを形に見せてく人たちは　国際交流協会のメンバーであり、文化国際課の職員であり、浦安市である。それがなかなか言葉だけでは伝わらないところが、ひとつのこのセンターの登場で、今後はきっともっとPRができるような状況になったのではないかと思います。

徳田　規約を改定してでも、新会員の入り口をもっと増やしたいと思っています。ホームステイは、文化交流部会の中にあるけど、やりにくいから独立したいと言っていますし、青少年部会というか、子供部会というものも設けたいのです。初期の青少年派遣者は、もう 30 数歳になっています。そういう方の入り口も設けたいし、活性化のためには、青少年部会が是非欲しいですね。

藤岡　そういうことに熱意を持って、それをリードしたり、ケアしたりする人がいるか、いないかが決め手となります。新体制に切り替えた当時は、たくさんの委員会を残してもそれを立派に運営していくだけの熱意のある人がいなかったということです、一番基本は。だから、そういうニーズが出たというのなら、すばらしい。

学生委員会だってこちらから責任追及したわけではなく、たまたま（担当していた）学生が卒業してしまい、誰もいなくなってしまったので、しょうがないから活動中止にした。講演シンポジウム委員会は、実は、私がやめましょうと言って止めたわけだが、これは各委員会が力を持って、みなこのミニ講演会をやりだした。国際交流協会として、また別にやるという意味がなくなってきた。それで、総会だとかなんかの場合には、実行委員会が行い、そこですべてやればよいわけで、専門の委員会は止めました。それ以外は積極的に止めてくれといって止めたわけではない。

県が主催する国際交流の会合での話を聞いていたら、この頃からは補助金もなくなりました。浦安自身は今のところ確かに豊かですが、しかしこれだけ手を広げたら大変厳しいことに私はなると思う。だから、そちらは十分考えておかなければということは非常に痛感している。

徳田　活動の幅に対応した財源確保の問題ですね。

辻村　地域の中に大きいものや小さいものや、さまざまな国際交流・協力団体が出来て、交流協会の求心力が落ちてきたということはいえます。協会で活動している人も、自分のやりたいことをやっているので、全体はどうでもよいという傾向にあります。これが協会の現実の流れだと思います。

藤岡　その一番顕著な例がこれです。ある委員長が、ご主人の九州転勤で辞めることになり、委員長、副委員長クラスが集まって送別会をやりました。非常に意欲的な人でした。ところが浦安に帰ってきてどうなったかというと、独立してしまい、とうとう UIFA に戻ってこなかった。今でも活動はやっているようです。自分の本当にやりたいことをやりたいんで枠をはめられるのは嫌いという人はボランティアやった人には非常に多いですね。だから逆にそれだからボランティアやっていけるのですね。

辻村　仮に UIFA が事務局員を数人採用し、事務局で多くの事業を企画したとすると、一般の会員は参加して時々お手伝いをしながら自分も楽しむだけで済みます。会員だけで全部運営するのはどうかなと思ってらっしゃる会員には朗報でしょう。外国人会でイベントをやると、100 人とかがワーッと集まる。それは外国人会が企画をしているから、皆さん参加するだけで済むからです。国際センターも、今は国際協力関連イベントが重点ですが、企画力を持つようになり活動の幅が広くなると同様の現象が起るでしょう。ところが現実には、UIFA 会員になったら企画や運営もしなければならない、部会に入って何かやらなければならないというのが重荷になるのだろうと思います。

徳田　ある程度、自分で企画も運営もやってくれる人がいたのが、この４部門だったということですね。

藤岡　そのときにやれそうなのは、それしかなかったのです。

徳田　委員会を削減せざるを得ない理由は、ある程度理解していました。シンポジウム委員会も、出番が年２回だけ、ホームステイ委員会も、出番はゲストが来る時だけ。普段は運営委員会に出てもじっと座って他の話を聞いているだけだから、意気は上がりません。

藤岡　いや、やろうと思えばホームステイは本部へも依頼はあったのですよ。受けられないからです。そんなに無理せんでも良いと受け入れを断られる。だからなるべく受けないようにしていた。その気になったらいくら

でもありました。

徳田　そうすると、現在の役員会の責任において部会を増やしても問題はないですね。

藤岡　問題は本当にやる人がないところに増やしたはいいが、止めなはれとなるともっと困ります。それだけです、はっきり言えばですね。辻村さんが課長で長くやって国際交流のほうの受け手になっていただいていたから、スムーズにできていたのです。今はね、先方は是々非々でしか付き合いませんからね、こちらがさっき言われたように、そんなしんどい仕事を誰も関知しないのにこんなことをやるのかと断られる。情熱を持ってやる人がいなかったら、これはもうお仕舞い。前はこういう場合でも市役所で受け手があったわけ、だから出来たのです。

それでね、実行委員会もずいぶんありましたよ。どうしてかというと、どれかの委員会に入ってなくても、実行委員会は入ってよいとして一人でも興味のある人を入れようとしてやったのです。　ところが、それがなかなか来ないのです。結局友好の翼に行ったとか、語研にちょっと関係あったとか何か関係のある人でないと、来ないですね。そこのところ、辻村課長はどうお考えですか

辻村　やはり普段付き合ってないと反応はないですね。

徳田　関連の話題をお伝えします。UFRA に所属してきた人が UIFA に入りにきました。その方の居場所を UIFA に作ろうといっても、今の４つの部会制ではこの方の活躍の場がないのです。また、ちょうど１週間前、国際交流子供フェスティバルを催しましたが、在住外国人の方々も大勢来られて、私たちがいつまでも交流の場でゲスト・ビジターではいけない、やはり双方向からやらなければいけないのではないかというご意見を頂きました。

大野　私も日本語ボランティアをやっていた時、うまくやっていけないのは結局、こちらから押し付けで、あーだ、こうだとやってあげて、相手の意思とかを何も入れないで、ただ、与えているだけという。そうではなく彼らは、自分たちの企画に参加したいという。私はもうどうしてもそういう交流というのは、５０：５０でやっていきたい。あちらからもオファーして、こちらからもオファーしてやっていけば良いのに、かなりこちらから一方的に押し付けていく。日本語のボランティアもそういうところがありまして、それでサロンというようなものを作ったのです。

最初のサロン活動は 401 会議室で行ったのですが、子供たちが廊下を運動場代わりに走り回り、親は親で自分たちのおしゃべりに夢中になって、子供を咎めることもなく、後で苦情が来たようです。それに対して辻村さんのほうで受け止めてもらっていたことを伺い、今でも申し訳ないと思っていますが、その時、辻村さんのほうから、今後 401 会議室でサロンみたいなことをするのは止めてくれと言われていたら、もう続かなかったと思います。そういう意味で受け皿みたいなものがあったということが、活動する面では、非常にありがたかったことです。

徳田　日ボを独立させようという雰囲気は 1997 年頃からだいぶ出ていましたが、４部会制の選択肢の中になかったのですか

辻村　逆の意見が強かったのです。というのは運営委員会に代表を出したくないと言うのです。独立させると、逆に代表を運営委員会に出さなくてはいけない。それはいやだった。出るのがいやだった。そういうのがかなり強かったですね。

徳田　立派なご経歴の男性も多数活躍されているのですが、そういうところに出るのがいやだったということですね。

辻村　当時運営委員会は面白くないと思われていたと思います。

三浦　基本的に今でもその傾向はありますね。自分のやりたいことはこれだと。あそこでやってるのは自分のやりたいこととは関係のないことだ。時間のむだだと。

藤岡　それはね、そちらのほうでやってくださいということですよ。率直に言えば場所取りと予算さえやってくれればあとは私たちに自由にやらせてくれよ　という考えなんですよ。これですよ。本音を言えば。

徳田　日ボ独立機運は弱かったことが分かりました。二つだけ簡単にお尋ねします。役員会でも、この規約おかしいよ。これほど運営会議、いわば実質的役員会が責任を負っているのに、ぜんぜんオーソライズされてないですよ　と言う意見があります。

藤岡　いやいやそんなことはないですよ。運営委員会はあくまで理事会で基本的なUIFAの方針を決めた範囲で、デイリーのことはすべて運営委員会で決めます。こういう位置づけでずっときています。

徳田　他の交流協会などの規約を見ると、もう少しキチッと役割を書いていますね。

三浦　規約の書き方としては、理事会は運営委員会を設けることが出来ると記されているだけで、軽いですね。

辻村　運営委員会のメンバーは理事会のメンバーですね。最初は、規約上、理事会だけで、運営委員会はなかったのです。でもそれを入れましょうということで委員長を全部理事に入れて 30 名にしたわけですけど、そこからスタートしているから、活動している理事と団体理事が一体化したわけです。今は部会が少ないから運営理事が４人しかいないのでそうなると比率が小さくなってしまうわけですね。

藤岡　それでも会長、副会長２名、会計を加えると８人。団体理事の出席者は大体７名から８名だから、あそこで運営委員会の案が否決されたことはないと思いますけど。

辻村　正式な採決になると別ですね。でも今まで、一度も採決をしたことはないと思います。

藤岡　まあ、不信任案でも出れば別ですがね。　規約の件では、基本的には規約はなるべくサラリと書いて、あまり細かいことは書かないようにしようと、なるべく運営委員会で裁量できる範囲を多くしようと考えていました。理事会の開催ももっと少なかったのは、理事会が一番大事だということになるとまずいなという考えで少なくしていました。昔は理事会の前に懇親会をずいぶんやっていたのです。今はそれもやらないですがね。だから、大体そこで理事さんを呼んで何もやってなくても、その団体でUIFAというものに少しでも親しみを持ってもらおうというのが、狙いでした。

　規約も最初はもっと簡単でしたが、だんだん複雑になってきました。基本的にルールはなるべく無いほうがよいというのが浜野初代会長と私たちの考えでした。ただ、今の時代ですから、ちゃんと書くようになっても良いと思いますね。

徳田　次の質問です。団体理事の選び方ですが、教育委員長をやっていた浜野先生のお考えがあったのですか？

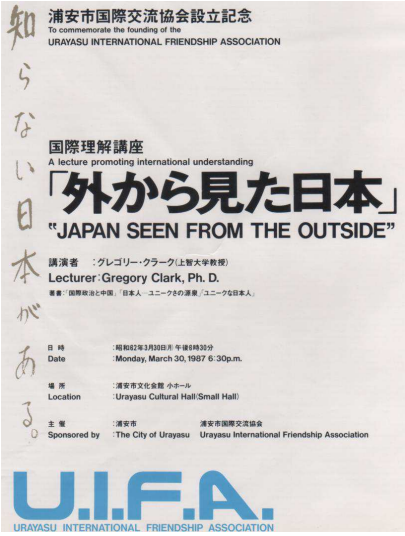
辻村　国際交流を地域でやっていくには、もちろん市民の方々も大切ですが、これから国際交流をやってもらう団体はすべて最初から理事として協会を支援し、そこの国際交流も協会が支援していく。だから、最初に、たとえば青少年派遣をやるときには、当然教育委員会だし、さまざまな国際交流をやっていくためには、そこの大きな団体が入っていなければおかしいから、たいていの団体を作るときにはそういうものなのですが、地域の中の主な団体の長、理事あるいは代理のような方に入っていただき、正規の団体をつくっていく、それが会を作っていくときの普通のやり方です。そこに一般の会員もいっぱい入ってこられる。その中の活動的な会員が構成する運営委員会メンバーが理事でないのは不自然でしょうということで委員長９人を理事にしたあと、会長のスタッフにもなってもらい、普段はそのままスタッフとして活動し、事務局を動かしていって、それで

一般会員には、さまざまな事業をやったときに参加してもらおうという形になったのです。

徳田　私が不思議に思うのは、これほど外国人医療問題や医療通訳ボランティアが話題なのに、あの中に医師会がないのです。関西へ行くと創立のころから協会理事に医師会が入っています。

辻村　浜野さんは、UIFA の会長になられたときは医師会の会長でしたね。医師会会長がおられるのだからからいいや、という空気で医師会というのは抜けたのではないかと考えましたね。ただ、医師会との調整はずいぶんやりました。外国人会が多かったですが。外国人会と医師会は会合をもって、外国人住民への医療周知や外国人患者さんとのやりとりをどうして行くんだということをずいぶんやりました。

藤岡　UIFA が発足したのは、1987 年２月 20 日にグレゴリー・クラークさんの講演会があったのが始まりですが、その前に熊川前市長も入って発起人会というのを発足させました。市が作ったのですが、そのときに浜野先生がやはり、なにかやりそうだからそのために優良な団体の代表を入れて発起人会を発足させました。発起人会はその代表だけなのです。それで出来上がって実際にやったのは、当時まだ国際交流課はなかったので、秘書課の中に国際交流係みたいなのを作って、その人たちがお膳立てして、この国際化の話をグレゴリー・クラークさんに語らせようと企画したのです。それが終わってから、年度が変わってすぐ、一般市民に「今度国際交流協会ができましたので、どうぞ参加してください」と言って美浜公民館の２階の大広間に集めたわけです。このとき、発起人会に市民代表として、外国人３名、日本人３名、それから大きな団体の方々も参加しました。その団体の代表は全部理事会に正規に登録され、その他の団体もその後で登録されました。



徳田　最初からＰＴＡ連絡協議会の会長とか、校長会会長とかは入っていたのですか？

藤岡　教育に関係すると考えていたので、教育長も入っていたし、その他の団体も入っていました。

徳田　ところが理事会に来て下さる団体の代表には「私、なぜここへ来ることになっているのでしょうか?」と正直におっしゃる方もあります。だから、国際交流に熱心なランナーズクラブのような団体の代表などに来てもらったほうがずっと効果があるのではと思っています。

辻村　団体の理事の中にはそういう方が半分くらいおられます。

藤岡　中にはね。　そうは言っても自治会連合会などは住民全体を代表する強力な団体だから、お付き合いは重要です。

辻村　ただ、だんだん協会が理事会に登録されている団体にサポートされているという意識もなくなってきました。もともと運営委員会などサポートされているという意識はないでしょう。一方団体も協会をサポートしているという意識も少なくなってきたということではないですか。だからそこのギャップが出てくるわけですが。そういうふうにサポートを得て、協会が成り立ち、私たちの活動があるという発想にはなかなかならないので、そのあたりの考え方の違いが難しいところですね。

藤岡　だから婦人の会とか、UFRA とかライオンズとかに何か会合があると出席したり、話を聞いたりしていた

のですよ。日ごろ付き合っていないと、急に頼んでも全然だめだから。

徳田　私は団体会員を一生懸命集めています。

藤岡　有難うございます。あれもね、私は全然苦労しないで、全部辻村事務局長にやってもらったのです。向こうは、国際交流協会というよりは市から頼まれたと思うのですよ。向こうとしても大義名分が立つわけです。それに対し、だれもどうこう言う人はいないのです。

徳田　最後にお二人から一言ずつお願いします。

辻村　これから「国際という視点」がものすごく重要な時期に来ていると思います。さまざまな文化の異なる人々が一緒に地域で暮らしている状態ですから、協会の役割はこれからますます大きくなるし、大きなきっかけ作りの役目を果すでしょう。国際交流協会が活発に活動し、市民をリードしていくことは街の中で大切なことだと思いますので、ますますがんばっていただきたいと思います。

藤岡　もう辻村さんからぜんぶ話してもらったので、お話しすることはないので、ちょっと違う話をします。偶々、浦安市内の中学で国際理解講座を頼まれてやったのですが、我々は今まで国際交流協会にいるような人たちを相手にしていましたので、国際協力とか国際交流は大事だとみんな思っていると思っていました。相手は中学３年生なので国際協力とか何とか全部で５つくらいの話題を話したが、全然興味を示さなかったし、何をしゃべっているのかなという感じでした。

私は中学３年生といえばもう少し難しいことを習っていたような気がしていましたけれど。地図を見せてこの国は何かと聞いても半分以上は分からない状況です。国際化とか、国際理解とか言われているけれど実際にはまだまだだという事実を今頃になって知ったわけですよ。だから僕はもう役割を終えたと思っていたのですが、そうでなかった。むしろ言われたように本当に興味のある人を何とか発掘して熱意のある人にひとつでもなんかやっていただき、目に見える成果が挙がると関心を持つ人が出てきますからね。そういうことが必要だなと思いました。

徳田　どうも長時間有難うございました。

３．２　　委員会活動から部会活動へ

――新 UIFA 構想実行委員会――

元副会長　宮澤　君子

【実行委員会設置の目的】

平成 13 年（2001 年）に浦安市が策定した「浦安市国際化指針」に沿って、UIFA が市から独立して活動できる団体（独立任意団体）になることを目指し、これまでの体制から運営方法、活動方針、活動内容などを多目的、根本的に見直し、協会員のみならず、市民の期待にも添う新しい UIFA として出発することを目的に設置した。

【発足の経緯】

1）2001 年度の活動の一つとして、「UIFA が市から独立し、浦安市の国際交流活動全般を支援できる組織となる」ための将来像を描く『規約見直し実行委員会』をたちあげた。

2）社会情勢の変化や国際化へのニーズが、UIFA 創立当時と大きく変わり、また多様化していることから UIFA 運営のあり方や委員会活動の見直しなどの検討を開始した。

3）2001 年 6 月第 3 回の委員会開催時に、浦安市側から『早急な UIFA の独立体制の確立の必要性』が伝えられた。そのため、会の名称を「新 UIFA 構想実行委員会」と改め、2003 年春を目標に、独立に向けた検討に取り組んだ。

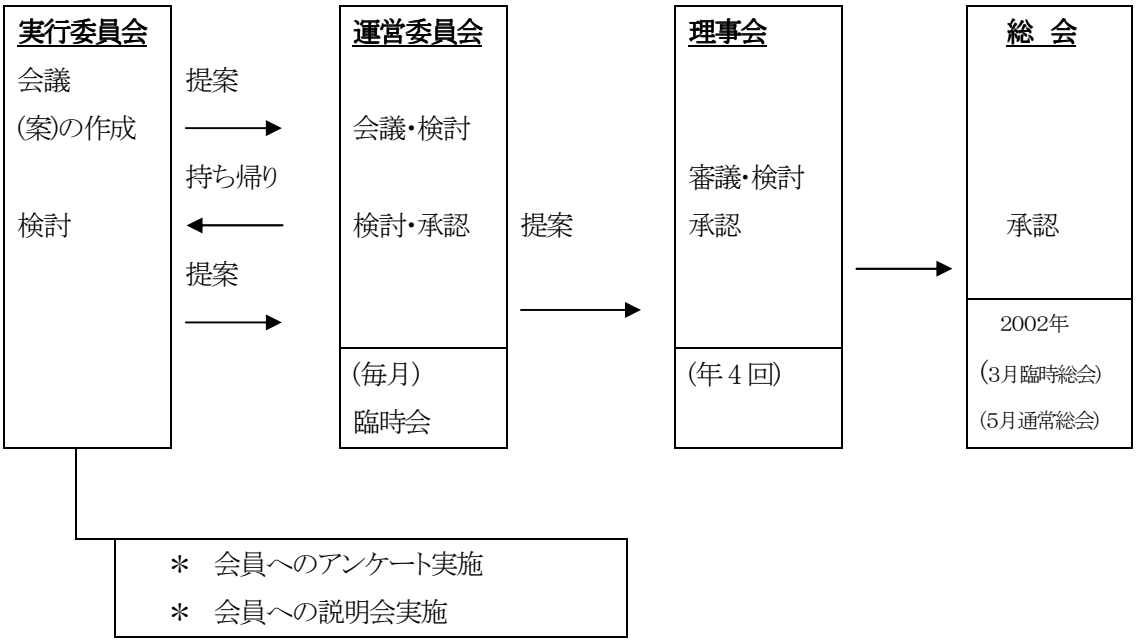
【実行委員会の構成メンバー】

UIFA の改革を検討する重要な会であるため、これまでの委員会活動家をまじえて論議できる各委員会からのメンバーの出席を求めた結果、実行委員長・副実行委員長・副会長・各委員会代表（8 名）の合計 11 名でスタートした。

（会長・会計はメンバーには入らず、助言できる立場での参加）

【検討の進め方】

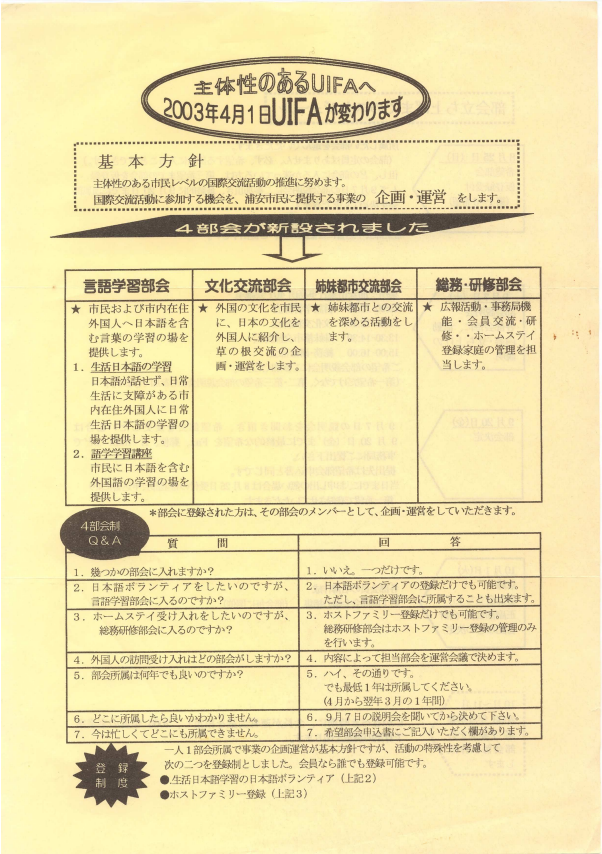
（実行委員会と運営委員会･理事会・総会とのかかわり）



【検討の経緯】

第16回～第18回 3/25　　4/9	①　グループ名称の検討と活動内容の確認 言語学習部会―市民及び市内在住外国人へ日本語を含む言葉の学習の場を提供 ＊　生活日本語:サバイバルクラス　テキストを決める
第1回～第4回 2001年6/23～8/24	①　UIFA初級・中級・講座の検討　②UIFAらしい事業の検討 ③　組織・委員会活動・学習講座・委員会の統廃合の検討への繰り返し
第5回 8/30	①　独立の方向性→事務局の独立・事務局員の雇用 文化交流部会―外国の文化を市民に、日本の文化を外国人に紹介し ②　独立までのスケジュール 草の根交流の企画運営をする ③　規約等の改正案
第6回・第7回 9/18　　10/2	①　姉妹都市交流部会の更なる検討　姉妹都市との交流を深める ②　2003年3月に新体制でスタートするための臨時総会の開催について （規定はオーナーが決め）
第8回～第10回 10/13　　12/6	総務研修部会―広報活動・事務局・会員交流・研修・ホームステイの ①　補助金要綱についての情報収集 コーディネート・登録家庭の管理 ②　委員会活動の内容確認 ③　抜本的再編成に向けて、UIFAとして必要な活動の洗い出し その他――――海外支援・アセアン青年招へい事業 ＊　言語(日本人に外国語を・外国人に日本語を) ＊　市民と外国人との交流・内外文化交流 ※実際に委員会活動をしているメンバーによる会議であったため、議論は白熱し、もっと幅広く、多彩にこれまでの活動を続けたい旨の意見も相次ぎました。しかしこの時点では、補助金の削減・自立という大きな課題があった為、活動内容についての検討を重ね骨子案を確立しました ＊　姉妹都市交流・内外都市交流・ホームステイ ＊　広報・事務局・会員交流・研修
第11回 2002年1/16	①　臨時総会開催に向けての内容の確認 ＊　事業計画・予算案・人事案・規約改正など ③　事務局員募集要項の検討 ②UIFA組織案の検討、運営会議メンバーは三役と正副部会長の12名とする
第12回～第14回 2/6　　3/5	①　根本的再編成に向けての活動内容の精査 ＊　補助金は減額されるという方向で、必要最小限の活動、自立してやっていける活動について検討した
第19回 4/16	①　規約改正案の検討と作成 ②　事務局員応募者11名 （書類選考・面接を実行委員会と運営委員会三役で実施）
	＊　事務局員星井さんに決定2002年4月からの雇用 ＊　上記の、件臨時総会での決議事項とした
第15回 3/19	①　新UIFAの活動内容の決定

2002 年 5 月 18 日 通常総会	**通常総会において規約改正および　2003 年４月から４部会制での スタートが承認された**
第 20 回 6/18	①　部会立ち上げの検討 ②　部会員の募集から立ち上げまでのスケジュール
第 21 回～第 26 回 6/18　　9/21	①　新 UIFA　の告知 ②　部会説明会の開催と説明内容の検討 ③　説明会までのスケジュールの決定 ※　従来の委員会制では複数委員会への登録、活動が自由であったため、弊害についても議論され、以下の結論を得た ・　活動をより活発に市民に期待される運営をしよう！と 一人一部会制 ・　ただし、日本語ボランティアやホストファミリーは登録制 重複可となった ・　三役は部会に所属しない
2002 年 10 月 19 日	8月末までの部会登録及び9月7日の部会説明会を経て、部会の立ちあげを行った
第 27 回 11/16	部会立ち上げにより実行委員会を解散した



主体性のあるUIFAへ
2003年4月1日UIFAが変わります

基本方針
主体性のある市民レベルの国際交流活動の推進に努めます。
国際交流活動に参加する機会を、浦安市民に提供する事業の 企画・運営 をします。

4部会が新設されました

言語学習部会	文化交流部会	姉妹都市交流部会	総務・研修部会
★ 市民および市内在住外国人へ日本語を含む言葉の学習の場を提供します。 1．生活日本語の学習 日本語が話せず、日常生活に支障がある市内在住外国人に日常生活日本語の学習の場を提供します。 2．語学学習講座 市民に日本語を含む外国語の学習の場を提供します。	★ 外国の文化を市民に、日本の文化を外国人に紹介し、草の根交流の企画・運営をします。	★ 姉妹都市との交流を深める活動をします。	★ 広報活動・事務局機能・会員交流・研修・・ホームステイ登録家庭の管理を担当します。

＊部会に登録された方は、その部会のメンバーとして、企画・運営をしていただきます。

4部会制 Q&A

質問	回答
1．幾つかの部会に入れますか?	1．いいえ。一つだけです。
2．日本語ボランティアをしたいのですが、言語学習部会に入るのですか?	2．日本語ボランティアの登録だけでも可能です。ただし、言語学習部会に所属することも出来ます。
3．ホームステイ受け入れをしたいのですが、総務研修部会に入るのですか?	3．ホストファミリー登録だけでも可能です。総務研修部会はホストファミリー登録の管理のみを行います。
4．外国人の訪問受け入れはどの部会がしますか?	4．内容によって担当部会を運営会議で決めます。
5．部会所属は何年でも良いのですか?	5．ハイ、その通りです。でも最低1年は所属してください。(4月から翌年3月の1年間)
6．どこに所属したら良いかわかりません。	6．9月7日の説明会を聞いてから決めて下さい。
7．今は忙しくてどこにも所属できません。	7．希望部会申込書にご記入いただく欄があります。

登録制度
一人1部会所属で事業の企画運営が基本方針ですが、活動の特殊性を考慮して次の二つを登録制としました。会員なら誰でも登録可能です。
●生活日本語学習の日本語ボランティア（上記2）
●ホストファミリー登録（上記3）

新しいUIFAの案内

３．３　　ＡＳＥＡＮ青年招待事業開始の経緯

元会長　藤岡　順次

UIFA は誕生５年後の 1991 年３月に外務省の外郭団体である「国際交流基金」から、地域での市民主体の交流活動が評価されて、「地域振興賞」を受賞し、その副賞として 150 万円を受領した。

その有意義な使途を検討する為に、永末洪氏を委員長とする実行委員会を立ち上げ、運営委員会メンバーも加わって１年間にわたる議論の結果日本が将来とも親しく交流してゆくべき近隣諸国として「アセアン６ヶ国（当時）」を対象に選ぶ事とし、具体的には、これらの諸国で日本に興味を持ち、日本語を習っているが、日本へ来たことの無い青年を信用ある機関に推薦して貰い、その候補者の中から、実行委員と３役とで選考する事にした。

最初の討論の過程で、欧米先進国は自分の費用で来日が可能であるとして対象に入れず、東欧などの遠距離の国は費用の点で外し、中国は、日本各地に日中友好協会があり、色々な交流事業が行われているのでこれも対象としなかった。

資金的な裏付けを確保する為、基金事業特別会計を新設し、浦安ライオンズクラブから戴いた支援金 250 万円も繰り入れ、その後も一般会計の支出の節減を図り、繰越金の一部を繰り入れるなど、基金の補強に努めた。

対象国の信用のある適切な機関を決めるに当たっては、辻村国際交流課長（当時）を通して留学生に日本語教育をしていた国際教育学院の根岸校長（当時）に紹介して貰い、この機関に候補者を推薦して貰う事になった。

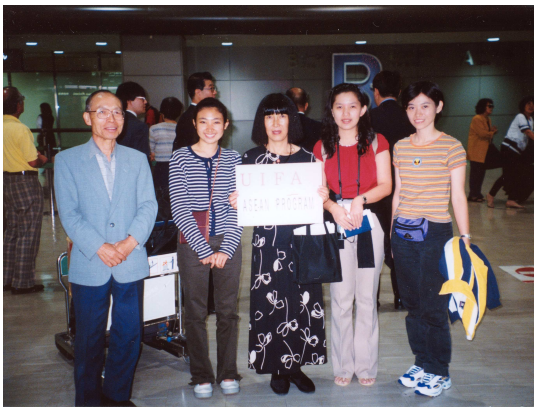
当時インターネットは無く、FAX も充分に機能しない相手もあったので、相互の交信や資料の送付など事務量も膨大で手間隙がかかり、ビザ発給手続きや航空券の支給や更に成田空港との送迎など、国際交流課の職員の全面的な支援によって実現出来たものである。

また、約２週間のホームステイとしたので、ホストファミリーの選定や実行委員との緊密な連携も必要であ

	論文課題	出身国
1993 年３月	あなたは何故日本語を勉強しているのですか	インドネシア　２名、タイ　２名、シンガポール、フィリピン

った。

青年が滞在中に、日本語講座への出席、日本文化体験、浦安市内見学（市の設備も含む）、明海大留学生や小学校生徒との交流、各国紹介やシンポジウム、東京など近隣都市見学、ディズニーランド見物など盛り沢山な行事を組み込み、日本を良く知って、将来両国の架け橋になって貰う事を期待した。



第１回目の招へい事業は 1993 年３月 13 日から 27 日に実施したが、６名の青年を迎えたときの感慨はまことに深いものがあった。

第２回目に招いたタイの学生が履歴書の写真から女性と判断してホームステイを依頼していた所、空港で男性と判って絶句したり、その後あるホストファミリーが留守勝ちで、受け入れた青年の世話をあまりしていないことが判ったりしたのも、慣れない頃の失敗談である。また最後の招聘時には一旦決めた招聘スケジュールが、急に市長選の予定が入り翌月に繰り延べたのも印象に深い。

紆余曲折を経ながらも、2002 年 11 月の第９回まで続いたのは、来日青年が何れも素直で真面目で愛国心溢れる好青年だった事、ホストファミリーと本当の子供のような強い絆が出来た事、ＵＩＦＡの実行委員も深い感動と充実感を得られたこと、市の職員の全面的な支援が得られた事によるものである。

1993 年 11 月	私の将来の夢	マレイシア　２名、フィリピン、タイ、インドネシア、シンガポール
1994 年９月	私から見た日本	マレイシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、タイ、ブルネイ、
1995 年８月	私の家族	マレイシア、フィリピン、インドネシア、シンガポール、タイ、ブルネイ
1997 年５月	これだけは知って欲しいわたしの国	シンガポール、フィリピン、インドネシア、タイ、ブルネイ、ベトナム
1998 年５月	私が日本語を学ぶわけ	フィリピン、インドネシア、マレイシア、

		ベトナム、タイ
1999 年６月	私から見た日本	フィリピン、インドネシア、マレイシア、ベトナム、タイ
2000 年９月	日本でしてみたいこと	フィリピン、インドネシア、マレイシア、ベトナム、タイ
2002 年 11 月	私と日本語	フィリピン、インドネシア、マレイシア、ベトナム、タイ

2002 年で打ち切り、2003 年はこの事業を振り返り、その実績を纏めて公開して一段落としたのは、UIFA が市から将来とも多額の補助金を貰うことは出来なくなると見通したことと、UIFA の市への依存を無くし独立して事業を行うよう迫られていた事により、特定の会員にあれだけ煩雑な事務をこなし、時間を掛けてもらうには無理があり、毎年 150 万円近い多額の予算を使う事業は続けられぬと判断した為である。

招へいした ASEAN 諸国の青年たち

３．４　ＪＩＣＡ（ 国際協力機構 ）青年招へい事業への協力の経緯と経過

前会長　竹中　睦祐

１　経緯

UIFA ではその理念に沿って協会事業としてまた浦安ライオンズクラブの資金援助、協力を得て、アセアン青年招へい事業を、平成５年の第１回より毎年第８回までと平成 14 年の第９回の計９回行いました。これはアセアン諸国の青年の中で日本語を学び、来日の経験がなく、現地の機関が推薦する希望者を論文審査で各国一名を選考し招へいするもので、浦安でホームステイし、市長表敬、協会員による日本文化体験、日本語学習、大学訪問、社会見学、ディズニーランド見物などを実施しました。しかし当時の市国際交流課に置かれていた UIFA 事務局の浦安市からの独立の要請と、UIFA の事業改革の機運の中でこの招へい事業も見直されることになりました。更に招へい青年の募集から始まる多くの事務手続きおよび事業資金である特別会計基金の減少により第９回でアセアン青年招へい事業を一時中止することになりました。

しかし多数の会員より事業継続への要望も強いことから、内容を見直し、実行の可能性がある方法を検討するための検討会が平成 15 年７月第１回 ASEAN 検討チーム会議(出席者：協会三役と各部会代表の藤岡、竹中、大森、越、池田、原、長坂、江上)が開催されました。会議はその後２回開催されましました。

会議ではアセアン青年招へい事業の問題点の整理、経済的負担、実施することの意義、招へい青年のその後の

フォローなどを回顧し、新たな進め方を模索しました。結論として、それまでの事業をUIFAが再開し実施するにはあまりにも問題が多く、外部機関が行う外国からの招へい事業への協力の形で同様の事業が出来ないかということになり、同様の事業を行う国内事業団体を調査しました。その中でJICAの行っていたJICA青年招へい事業への協力が候補に残りました。当時の市文化国際課の全面的な支持・協力を得て、同事業で海外青年を既に受け入れた実績のある千葉県国際交流センターやJICA(当時は国際協力事業団)東京国際センターを訪問しての可能性調査を通じて実施可能の感触を得、先ず次年度の募集に試行をして応募することとしました。その主な理由はそれまでのアセアン青年招へい事業とほぼ同様な趣旨の元で、浦安での国際交流・協力活動が可能でかつ主要な費用はJICAが負担しUIFAの経済的負担が少ないことでした。

JICAの平成16年度JICA青年招へい事業の募集にあたって平成15年11月にUIFAとして初めて受入れ資格審査応募と受入提案をJICAに対して行いました。

２　JICA青年招へい事業の概要

JICA(独立行政法人国際協力機構：外務省所管)が実施している青年招へい事業は開発途上国などの将来の国造りを担う青年を約3週間日本に招へいし、研修・交流を行うものです。この事業の目的は「海外の青年の人材育成、日本人との相互理解、交流の促進」で、官民を挙げた協力で実施され毎年80の地方団体が参加し受け入れています。その実績は1984年以来2005年までに述べ120ヶ国以上から延べ3万人を受け入れ、研修分野は教育、行政、経済、農業、保健衛生、社会福祉、環境保全などで、該当する青年は国家・地方公務員や民間関係者です。

UIFAがその事業の一貫として受託することは浦安市民による国際交流と異文化の相互理解の促進につながりUIFAの理念に合致する事業と考えられました。

３　第1回JICA青年招へい事業

JICAとの折衝を経て平成16年1月24日の検討チームの討議により、市の協力を得てJICAより打診のあった地方行政の研修生をマレイシアから受け入れるJICA事業を実地に勉強しながら実施することに決定されました。平成16年2月21日の運営会議を経て、同日に第1回の会合でJICA事業委員会が発足しました。（委員長兼コーディネータ　竹中、　副委員長　越、、　会計　原、　委員は池田、大野、金子、高崎、永末、藤岡、山上の皆さん）　以後3月13日の第2回以下10月の反省会まで同年度は15回の委員会が開催されました。主な作業内容は実施計画の作成と関係先への手配、マレイシアについての勉強、通訳の手配、研修資料の作成・翻訳・製本、宿泊・食事・会合場所の手配、ホームステイ先の確保など多岐を極めました。特にマレイシアについての情報、翻訳、通訳の手配にあたっては日本マレイシア協会の協力を頂きました。

事業の概要は以下の通りです。

・研修の目的　マレイシアの若手公務員に、説明と施設見学の両面から浦安市の行政の概要を理解させると共に、日本文化紹介や市民との交流を通じて、日本社会・日本人に親しみと信頼感を醸成させる。
・研修期間　平成16年9月14日から9月21日までの8日間
・研修対象　マレイシアの国家、地方公務員　男女　22名
・研修分野　地方行政
・研修場所　浦安市文化会館など市施設、ホームステイ先
・宿泊　　新浦安オリエンタルホテル
・事業規模　約465万円

・研修実施内容とスケジュール　**第１表**を参照ください。

実施の状況は浦安市國際交流協会ニュース第 71 号に掲載された報告をご覧下さい。

研修生からは、浦安の行政サービスが充実し参考になった、快適で疲れを感じなかった、郷土文化や歴史を大事にしているのが印象的など好意的な感想が述べられました。

UIFA としても浦安の行政概要とともに伝統文化の紹介、市民との交流を通じて日本の社会や日本人への親しみと信頼感を培うことができ、日本人を理解してもらえました。

マレイシア人はイスラム教徒が殆どのため文化・宗教観から来る多くの困難がありましたが無事終えることができました。

JICA からは実施内容、事後の報告の整理、市の全面的な協力につき高い評価を頂きました。

第１回 JICA 青年招へい事業
マレイシアからの青年２３名

第１表

日順	月日	曜	時間	日　程	内　容	目　的
1	9/14	火	AM	東京より移動	浦安のホテルにチェックイン後、文化会館へ	移動
			AM	歓迎式、プログラム説明	市幹部、協会会長挨拶 プログラムの説明	浦安での関係者紹介とプログラムの理解
			PM	市役所、市内一巡	市課長より説明、案内	浦安のイメージを掴む
			PM	歓迎会	市長、市関係者、協会関係者との歓迎会	
2	9/15	水	AM	講義、市議会見学	市課長が組織、予算概要説明	市政の基本を知る
			PM	講義、施設見学	市課長の講義後、郷土博物館、図書館など（課長、館長）	生涯学習の重要さの理解
3	9/16	木	AM	講義、施設見学	市課長の講義後、高洲小学校(課長、校長)	教育行政に触れる
			PM	講義、施設見学	説明後、クリーンセンター（課長、施設長）	環境に配慮したゴミ処理、リサイクルを学ぶ
4	9/17	金	AM	オリエンタルランド社で講義	オリエンタルランド社の顧客サービスについて	顧客サービスのあり方を学ぶ
			PM	同社施設見学	実地見学	同上
5	9/18	土	AM	日本文化紹介	茶道、浦安囃子の鑑賞・体験	日本の伝統文化に触れる
			PM	自主研修		
			PM	ホームステイ		日本人の生活を体験
6	9/19	日		ホームステイ		同上
7	9/20	祝	AM	施設見学	歴史民俗博物館（佐倉市）見学	日本人のルーツを知る
			PM	自主研修		
			PM	交流・送別会	関係者、ホスト、市民、他団体との交流	幅広い市民との交流の場を兼ねる
8	9/21	火	AM	外国人との座談	在住外国人市民、マレイシア留学生との懇談	外国人から見た日本を知る。
			PM	浦安から大阪へ移動	浦安からバスで東京駅へ 東京駅から新幹線で新大阪駅へ	JICA 大阪センターへの移動

４　第２回 JICA 青年招へい事業

第１回の JICA 青年招へい事業の成功から、次年度も応募して研修生を受け入れることが委員会の反省会、運営会議で決定され平成 16 年 11 月に資格審査、12 月に受け入の応募を JICA に提出しました。平成 17 年１月に地方行政を研修するフィリピン青年を、JICA の要望により 15 日間の一貫型(中央+地方の両研修をまとめて実施)で受け入れることに決定しました。

招へい事業の再度の実施にあたって、JICA 事業委員会は運営会議で継続的な委員会として年度ごとに区切りながら実施し、委員は適宜募集補充をしながら進めることになりました。一貫型を実施するには従来東京で行われた一般行政の研修と日本青年との合宿･交流が第１回の内容に付加されました。

平成 17 年度に向けた JICA 事業委員会は平成 16 年 11 月以降 7 月の反省会まで,8 回開催されました。(委員長

竹中、副委員長　越、コーディネータ　原、　会計　山上、　委員、池田、大野、金子、長坂、永末、西川、藤岡の皆さん）　フィリピン情報ではフィリピン大使館の協力を頂きました。

事業の概要は以下の通りです。

・研修の目的　フィリピンの青年公務員に、講義、施設見学、合宿を通じて日本の地方行政制度の概要を理解させると共に、日本文化紹介や市民との交流を通じて、日本社会･日本人に親しみと信頼感を醸成させる。
・研修期間　平成17年5月16日から5月31日までの16日間
・研修対象　フィリピンの国家、地方公務員　男女　22名
・研修分野　地方行政
・研修場所　都内施設、千葉県と浦安市の施設、ウエルサンピア千葉、ホームステイ先
・宿泊　　浦安サンホテル、浦安ブライトンホテル、合宿中はウエルサンピア千葉
・事業規模　約960万円
・研修実施内容とスケジュール　**第２表**を参照ください。

第２表

日順	日付	曜	AM/PM	日　程	内　容	目　的
1	5/16	月	AM	東京より移動		移動
			PM	歓迎式、プログラム説明、市内見学 関係者歓迎会	市幹部、協会会長挨拶 プログラムの説明 市の概要把握	関係者紹介とプログラムの理解
2	5/17	火	AM	講義（日本の地方行政）	行政制度の説明	日本の行政制度の理解
			PM	本所防災館視察	防災施設の視察	防災の実情把握
3	5/18	水	AM	講義（日本の地域開発と活性化）	国と地方の経済政策の説明	地域活性化策の理解
			PM	日本科学未来館視察	日本の科学の現状を視察	科学の現状の理解
4	5/19	木	AM	東京江戸博物館視察	江戸より東京への変遷を見る	首都の位置付けと変遷の理解
			PM	国会議事堂視察	国の立法機関の視察	立法制度の理解
5	5/20	金	AM	市町村アカデミー視察／合宿地への移動	公務員の研修設備を視察し、人材育成について学ぶ	人材育成、教育制度の理解
			PM	合宿準備	オリエンテーションなど	
6	5/21	土		日本青年との合宿討議	テーマについて講義と討論により理解を深める	テーマについて知識、経験を交換して理解を深める
7	5/22	日	AM	全体発表	討議結果の発表	全員で理解する
			PM	谷津干潟自然観察センターを経て浦安へ	谷津干潟で環境保護を観る	環境保護の実情を視察

8	5/23	月		自主研修		
9	5/24	火	AM	講義（市政概要）	浦安市を例に地方自治制度その他を説明	市における地方行政の理解
			PM	図書館、郷土博物館の視察、市民交流会	生涯教育施設の説明と視察	生涯教育の理解

１０	5/25	水	AM	最新学校の視察	教育行政の視察	教育行政の理解
			PM	環境施設視察 特別養護老人施設視察	クリーンセンター、リサイクルセンターの視察 特別養護老人ホーム視察	環境問題、施設の理解 老人福祉施設を視察
１１	5/26	木		東京ディズニーランド視察	観光施設とその顧客サービスの視察	
１２	5/27	金	AM	日本文化体験	茶道、地方芸能の鑑賞 日本食の体験	日本文化に触れる
			PM	自主研修		
１３	5/28	土		ホームステイ		日本人の生活体験
１４	5/29	日		ホームステイ		同上
１５	5/30	月	AM	評価会準備		
			PM	評価会 交流･歓送会		研修の反省と今後の活かし方を考察する 市民との交流の場を兼ねる
１６	5/31	火	AM	東京へ移動		

実施の状況は浦安市國際交流協会ニュース 74 号に掲載された永末さんの報告をご覧下さい。

研修の前半では日本の行政や経済の講義や見学もあり多大の関心を持ち真摯に研修をしていました。今回は日本青年との合宿が 3 日間行われ、討議･意見交換では環境問題がテーマに取り上げられました。寝食をともにした連帯感から有意義な合宿となりました。ホームステイでは家庭で日本文化を体験して大満足の様子でした。ホストも外国の文化に触れる良い機会になりました。浦安ライオンズクラブの皆さんによる市民歓迎会も行われました。フィリピンはイスラム教徒が少なく宗教上の問題はありませんでした。ただ 16 日間の長い期間と内容が多岐のため委員の人数では不足し苦労が多かったようです。また合宿の日本青年の確保にも苦労しました。

第２回 JICA 青年招へい事業　フィリピンからの青年２２名

５　第３回JICA 青年招へい事業

第２回より本格的に継続しての受託となったJICA 青年招へい事業は前回の反省を踏まえて、大幅な委員の拡充をしました。前回同様、平成 18 年度も応募して研修生を受け入れることが委員会反省会、運営会議で決定され平成17年12月に資格審査、受け入れの応募をJICAに提出しました。平成18年１月に地方行政を研修するバングラデシュ青年を地方先行型(地方部分を中央に先行して実施)で受け入れることに決定しました。
当年度の事業委員会は平成17年12月以降18年８月の反省会まで９回開催されました。
(委員長　竹中　副委員長　越、長坂、コーディネータ　原　会計　西川　委員　秋元、池田、大野、金子、木川、白岩、徳田、永末、山上、吉田の皆さん)

事業の概要は以下の通りです。

・研修の目的　バングラデシュの青年公務員に、講義、施設見学を通じて日本の地方行政制度の概要を理解させると共に、日本文化紹介や市民との交流を通じて、日本社会･日本人に親しみと信頼感を醸成させる。
・研修期間　平成18年７月17日から７月25日までの９日間
・研修対象　バングラデシュの国家、地方公務員　男女　15名
・研修分野　地方行政
・研修場所　浦安市文化会館など市施設、ホームステイ先
・宿泊　　新浦安オリエンタルホテル
・事業規模　約477万円
　・　研修実施内容とスケジュール　**第３表**を参照ください。

実施の状況は浦安市國際交流協会ニュース79号に掲載された越さんの報告をご覧下さい。

バングラデシュ青年は殆どイスラム教徒で宗教上の苦労が食事、ホームステイ先確保で多かったようですが、いずれも青年も交流の中に知性と教養がうかがわれ、自制とマナーを備えた紳士・淑女でした。今まで知ることの少なかったバングラデシュという国とイスラム教徒との出会いには多くの新しい発見が多かったようです。今回は人数が 15 名と少なく期間も短かったので無事かつ順調に実施できました。実施場所も４月から開設された国際センターを多用できました。今回も歓送会では浦安ライオンズクラブの支援を頂きました。JICA 内部の改革で手続き、予算面で制約が多くなりつつも３年間の実施で実行面での自信ができました。

第３回　JICA 青年招へい事業　バングラデシュからの青年１５名

第3表

	日付	曜	AM/PM	日　程	内　容	目　的
1	7/17	月	AM	大阪より移動		移動
			PM	歓迎式、プログラム説明、青年カントリーレポート関係者歓迎会	市幹部、協会会長挨拶 プログラムの説明 市の概要把握	関係者紹介とプログラムの理解
2	7/18	火	AM	市長･議会議長表敬訪問･市庁舎視察 講義(日本の地方行政概論)	行政制度の説明	日本の行政制度の理解
			PM	講義(浦安市概要、財政、将来展望、地域振興など)	浦安市を例に地方自治制度を説明	市における地方行政の理解
3	7/19	水	AM	教育行政と最新の学校　明海南小学校を視察	教育行政の説明と施設視察	教育行政の理解
			PM	生涯教育説明と施設視察 浦安市内の視察	生涯教育説明・図書館視察 新旧市街の視察	生涯教育の理解 新旧市街の比較
4	7/20	木	AM/PM	東京ディズニーランド視察	顧客サービスの施設を視察	観光施設とその顧客サービスの理解
5	7/21	金	AM	講義(環境保護)と環境施設視察	環境問題の説明 クリーンセンター、リサイクルセンター（ビーナスプラザ)	環境問題、施設の理解
			PM	郷土博物館視察 社会福祉制度と施設視察	特別養護老人ホーム視察	老人福祉施設を視察
6	7/22	土	AM	ホームステイオリエンテーション 日本文化体験	ホームステイの説明 茶道、地方芸能の鑑賞	ホストファミリーの説明 日本文化に触れる
			PM	ホームステイ先へ		
7	7/23	日	AM/PM	ホームステイ		日本の家庭を体験
8	5/24	月	AM	自主研修		
			PM	自主研修 市民歓送会	歓送・交流会	
9	7/25		AM	JICA 東京へ移動		

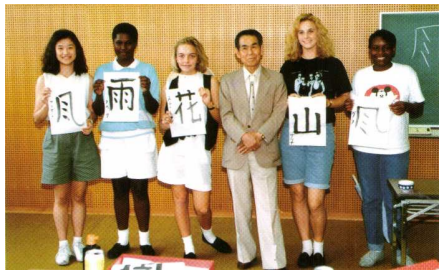
６　平成１９年度のJICA青年招へい事業

前年度に引き続いて平成18年12月より受入れの準備を行ってきましたが、JICAの青年招へい事業が改編され平成19年度の募集要項にはUIFAの受入れ可能なプログラムが無いため、平成19年1月のJICA事業委員会で応募を断念しました。平成20年度以降については未定です。

３．５　姉妹都市交流事業の２０年

元姉妹都市交流部会長　徳田　八郎衛

姉妹都市提携とともに、様々な団体が派遣されたが、現在も継続されているのは、教育・スポーツ（特にマラソン）、そして友好の翼である。口火を切ったのは教育交流であった。1988年春、姉妹都市選択作業の最中、オーランド市を仕事で訪問したUIFA会員多田清暉さんがDr.フィリップス高校を「発見」した。同校の国際学習センター（CIS, Center for International Studies）ではラテンアメリカや中国だけでなく、何と日本文化や初歩の日本語も教育していると聞いて姉妹都市交流部会員は驚いた。1989年秋から翌年早春にかけて両都市で姉妹都市提携調印が行われた後、早速交流を開始したのはオーランド側であった。1990年６月７日から７月４日にかけて、Dr.フィリップス高校生５名、教師１名が浦安に滞在し、浦安高校、東京学館などで短期留学を体験した。（写真右）。



これに続いて1990年12月23日～1月３日、浦安市中高生15名がオーランドへ派遣され、帰路、首都ワシントンDCも見学した。

翌1991年には、両都市で実施されるハーフマラソンにランナーを招聘、あるいは派遣する形でスポーツ交流が開始され、「市民なら誰でも参加できる」友好の翼ツアーが向かった。すなわち、

1991年５月８日～16日　　東京ベイシティ浦安ハーフにオーランドランナー３名が招聘された。
1991年７月29日～８月９日　浦安市中高生20名がオーランドへ派遣された。
1991年11月17日～24日　　第１回「友好の翼」40名がオーランド訪問した。
1991年12月３日～10日　　フロリダ・シトラス・ハーフに市民ランナーが４名派遣された。

これ以降、Dr.フィリップス高校生は1993年に20名、1895年に10名、1997年に13名、1999年に40名、2006年に30名が浦安を訪問した。2006年の訪日では、日帰りではあるが念願の京都訪問も行い、UIFAも協力した。

原則的に２年に１度の訪日であったが、2001年９月11日のテロで同校からの海外派遣はすべて中断し、2006年、７年ぶりに復活した。

付き添い教師（Chaperon）の氏名は次の通りである。

1990 年：　Karen Smith（国際学習センター長）

1993 年:　Karen Smith

1995 年：　Steve Mckiney（教頭）、Valene Shepard,

1997 年：　Valerie Shepherd, Jackie Coocens, Roger Barrows

1999 年：　Karen Smith (両親同伴), Alan Cox (校長), Valerie Shepherd, Steve Hardesty, Pat Martin, Terry Ault, Roger Barrows Roger Barrows

2006 年：　Steve Mckiney（教頭）、Roger Barrows（国際学習センター長）, Terry Ault

浦安からの中高生派遣（10～15 名）は、試行錯誤の後、８月中・下旬の実施が定着した。2001.9.11 テロにおいても翌年の派遣中止はなかったが、2003 年はサーズ流行のため中止された。また 2006.8.12 ロンドン空港テロ発覚事件により、2006 年８月の派遣は出発直前に中止され、翌年３月末に延期となった。

浦安市民ランナー４名の派遣とオーランドランナー４名の招聘は毎年継続されてきたが、2001.9.11 テロで同年 12 月の派遣は中止となったが、翌年３月の招聘は実施された。

友好の翼による浦安市民 30 名～40 名のオーランド訪問も毎年継続されてきた。特に 2000 年２月には姉妹都市提携 10 周年で友好の翼 100 名と市内諸団体数十名が訪問した。しかしながら 2001.9.11 テロで 2001 年２月の訪問は中止され、また 2006.8.12 ロンドン空港テロ発覚で 2007 年２月の訪問も中止となった。

３．６　　ＵＩＦＡ創立記念事業および姉妹都市提携記念事業

編集委員会

３．６．１　創立 10 周年記念事業

浦安市国際交流協会創立 10 周年を記念して 1996 年５月１８日、「記念総会・講演会」が開催され、次いで同年７月から翌 97 年３月にかけて、記念シンポジウム・「地球人大学院講座」が開催された。さらに、97 年 10 月 27 日には、浦安在住外国人会（UFRA）と共済で、記念イベント「うらやす国際交流のつどい」が開催された。

１　創立 10 周年記念総会・講演会

5 月 18 日、総会に先立ち、ジョン海山ネプチューン氏の記念講演会が開かれ、ユーモア溢れるお話と、ご自分で制作された尺八での演奏は、尺八の表現力の素晴らしさ・音の豊かさを感じ、日本の音色と言うより世界の音色となっていることを実感したものでした。

２　創立 10 周記念シンポジュウム「地球人大学院講座」

記念事業のシンポジュウム部門として企画され、地球に住む我々が考えてなければならない問題を**「アジアを学べば世界が見える」**をテーマに 5 回シリーズで開催しました。

第１回「意外と知られていないアジアの素顔」1996 年７月

第２回「アジアの国をもっと知ろうよ」1996 年９月
第３回「変わり行くアジアとその背景」1996 年 11 月
第４回「日本の安全保障を考える」1997 年１月
第５回「西洋から見たアジア」1997 年３月

３　創立 10 周年記念イベント「浦安国際交流のつどい」

記念事業イベントとして、UIFA・UFRA 一緒に「浦安市国際交流のつどい」を 1996 年 10 月 27 日（日）浦安市文化会館全体と外周りを使って盛大に行われました。大ホールのホワイエにおいて、各委員会の活動紹介をパネルにした展示、比較文化研究委員会によるお抹茶席と手作りグリーティングカードの販売・広報委員会のコーヒーコーナー・学生委員会が子供達と一緒に寄付された各国のコインの仕分け・各委員会を回るスタンプラリーもあり、参加者 800 人に近い人たちで大賑わい、ラリー参加賞の商品も盛りだくさんあり、担当した各委員会のひとたちもうれしい悲鳴でした。

又、外では屋台村＆ワールドバザールが開かれ、呼びかけに応じて、色々な出展があり売れ行きも好調でした。

ホールでは「記念メッセージ＆インターナショナルショー」があり、お祝いにかけつけたディズニーキャラクターのしまリス「チップとデール」が幼稚園の子供たちに大歓迎されて舞台の上から市長をはじめ、　UIFA・UFRA のメンバーと共に、ボールのプレゼント、客席は超満員、浦安ライオンズクラブからのご寄付、UFRA のエッセイコンテストの表彰・ノースウエスト航空券の贈呈などがあり、その後華やかな国際色豊かなショーが繰り広げられました。

東小学校の校庭でジェフ市原のサッカー選手による少年サッカー教室も開催し、総勢 1 万名近い人出となり、記念イベントは大盛況でした。

３．６．２　創立１５周年記念事業

１．アセアンフェアー　「2001 年 12 月 22 日」於：市民プラザ Wave101

アセアン青年招へい事業で招待した青年達のその後の活動やホストファミリーとの交流を探り、また今後の活動に反映さし、市民の皆さんに「アセアンの文化」などを知ってもらうために開催した。

フェアーの内容

【ギャラリー】

- 今まで招待したアセアン青年達の紹介パネル展示
- ホストファミリーの紹介及び受入時の様子。
- アセアンの民族衣装･民芸品･食品の紹介
- 観光スポット・まつり・民族楽器演奏・VTR 上映

【小ホール】

- ドキュメンタリー･ドラマの VTR 上映

【大ホール】

創立 15 周年記念イヤーエンドパーティー

- インドネシア･フィリピンの踊り・アセアンに関したクイズ

・　パーティーの食べ物はアセアンフーズ、非常に美味でした。

実行委員は全員アセアン民族衣装に身を包み、アセアンをコンセプトにしたイヤーエンドパーティーはいつもと違う雰囲気に包まれ大盛況でした。

2．Youth　Ambassadors　招待事業

第２回ユースアンバサダー招待として、オーランドから３名の高校生を招待した。

この事業は2001年浦安市制20周年記念事業として予定されていたが、前年の9･11同時多発テロの影響で延期されていたものです。エッセイコンテストで一次選考、25名が残り、面接の２次選考を経て、３名が選ばれました。選考はいずれも優秀な生徒達で、３人に決めるには忍びなかったと、オーランド市側の選考委員を務めた、姉妹都市委員会とオレンジカウンティ教育委員会の方からのコメントがありました。

予定のフライトがキャンセルになり、来日が１日遅れとなるハプニングもありました。

３名のユースアンバサダー

ステファニー・ギャラント	17才	サイブレス･クリーク高校	11年生	バイオ専攻志望
ニコール・ローセンガス	16才	アポカ高校	11年生	医師志望
マーカス・ワシントン	17才	アポカ高校	11年生	医師志望

浦安市長表敬訪問に始まり、市内見学、都内見学、市民との交流、日本文化体験と盛りだくさんのプログラムでした、ホームステイで日本の家庭での体験も良い思いでとなり、これからの“交流の架け橋”となることでしょう。

３．６．３　創立２０周年記念事業

UIFA創立20周年を迎え、特別基金より予算150万円を組み、３月末までに下記の事業を実施いたしました。

1．　市制２５周年記念ニコニコパレード（2006年６月25日）

姉妹都市交流部会が中心となり、パレードに参加、飛び入りも含め約50人近い人が姉妹都市オーランドを紹介する、プラカードをサンドウィッチマンのようにぶら下げ、鰐のかぶりものなど被った人もあり、青少年派遣でオーランドへ行った中・高校生も参加してパレードを盛り上げました。

２．　日本語グループ交流会（2006 年 11 月 12 日）　　於：美浜公民館

日本語ボランティアの方々と、日本語を習っている外国人の方々が、一同に集まっての交流会で、ボランティアの方々や有志の方から寄せられた品々をビンゴゲームの景品にして、受講生 50 人とボランティアをいれ 80 数名の交流会でした。

３．　記念講演会・年末交流会（2006 年 12 月 3 日）　於：新浦安オリエンタルホテル

創立 20 周年記念講演会として、元ＮＨＫ　ニュースキャスター磯村尚徳氏の講演会を開催しました。演題は「文化大国、コミュニケーション小国日本」と題して、講演頂き好評でした。引き続いて年末交流会に移り、若い芽うらやすなどで活躍している音楽家　フルート・ヴァイオリン・シンセサイザーの演奏、ラッフル、お楽しみ抽選会など多彩な企画で会員同士の親睦も大いに盛り上がったようでした。

4..　国際交流子どもフェスティバル（2007 年 1 月 21 日）　　於：マーレ研修室

初めての試みで幼児を中心とした国際交流子どもフェスティバルを開催しました。

外国の親子に日本の遊びなど体験してもらおうと呼びかけ、日本人親子を含め 20 家族約 40 人余りとスタッフで 50 数名、和気藹々と楽しみました。

5．「異文化交流へのいざない」狂言・オペラ（2007 年 3 月 10 日）　　於：文化会館小ホール

西洋と東洋の伝統文化、オペラと狂言をコラボレーション。始めての試みでしたが、チケット完売して、ほぼ満席の参加者は、３部構成の企画に大満足でした。

１部・狂言「鈍太郎」２部・トークショー　３部・オペラ「愛の妙薬」どちらも素晴らしく、アンケートでもとても良かったと絶賛されました。

6．創立 20 周年記念誌作成

（本誌）

7．シンポジューム「外国人は何を求めているか」（2007 年 3 月 31 日）

在住外国人の職場事業に詳しい本田　博氏、医療関係の長谷川ジョシイ氏、教育関係の関口ミンノ氏の３名をパネリストとして討議し、文化の壁、言葉の壁があることなど、話されました。

言葉の壁は漢字が大きな障害となっています。しかし、別にもっと高い壁があります。それは、見かけだけで「外国人」と区別されることです。この壁を取り除くことがもっとも求められていることです。

３．６．４　姉妹都市提携１０周年記念事業

オーランド市と姉妹都市提携 10 周年記念事業は、UIFA を始めとして、市内各団体を巻き込んで一大イベントとなりました。

１．「友好の翼」スペシャル

「友好の翼」事業は例年募集 40 名でしたが、姉妹都市 10 周年記念として、100 名に拡大募集をしました。1999 年 7 月 31 日締め切り時点で 169 名の参加申し込みがあり、８月７日に公開抽選で 100 名を選び、2000 年２月９日から８日間“友好の翼スペシャル”として、オーランド市を訪問、市庁舎でウェルカムレセプションを皮切りに、10 周年記念式典･日本文化紹介と多彩なプログラムでオーランド市民と交流しました。

２．第１回 Youth　Ambassador　としてオーランド市の高校生招待

オーランド市の姉妹都市委員会から選出された、ジョーンズ高校より 3 人の高校生が招待され、UIFA 会員の家庭にホームステイで、滞在しました。

招待した Youth　Ambassador

Delina　Delphia　Doxilly　（16 才〕　愛犬が恋しくなる人懐こい少女

Hannah　Melton　（15 才）1 番大柄だけど、甘えん坊タイプの少女

Ebonie　Smith　（17 才）少し大人びたリーダー格の最年長の少女

招待プログラムの中には姉妹都市 10 周年記念イベントへの参加など、色々含まれ親善大使としての役割を果しました。

３．姉妹都市 10 周年記念イベント

1989 年 10 月 23 日に浦安市とオーランド市が姉妹都市の提携を結んで、様々な交流を展開してきました。

10 年目を迎え、浦安で大記念イベントを舞浜の運動公園で行いました。

式典には浦安市から松崎市長をはじめ、ＵＩＦＡ藤岡会長及び会員、記念事業参加団体、学校など総勢 500 人以上、オーランド市からはテイジー・ライナム市長代行初め市長団、

UIFA が招待した、ユース　アンバサダー、ランナーズ、シニアソフトボールチーム、Dr. フィリップス高校生など 120 人が参加しました。

式典に引き続いて、こもれび広場でオレンジの植樹・体育館横に設営した舞台で、お琴の演奏、東京学館浦安・吹奏楽部の演奏などがありました。また、舞台前のプロムナードには様々な屋台と体験コーナがならび、UIFA もお団子・鉄砲汁・焼肉･カレー・おでん等、「友好の翼」に参加した人たちも一緒に参加して、屋台村を盛り上げました。そして、会場の注目を集めたのが「UIFA 大抽選会」でした。アンケートの№が抽選番号とあって、競ってアンケートに応募する市民が多く、賞品も参加団体からの寄贈もあり、多数の当たりくじに会場は大賑わい。当たらなかった人は、フロリダ名産オレンジ１個が配られました。

３．６．５　姉妹都市提携１５周年記念事業

浦安市がアメリカ･フロリダ州オーランド市と姉妹都市提携を結んで、15 年目を迎え１５年間の意義ある交流成果を広く市民の方々に認識していただく事を目的に、実施されました。

１．姉妹都市提携 15 周年記念フェスティバル

実施日時：2004 年 10 月 16 日(土)　13：00～　於・浦安市文化会館大ホール

内容　：＊　「15 周年に亘る姉妹都市交流の歩み」スクリーン映像

＊　オーランド観光局によるオーランド紹介

＊　教育交流の報告と 2004 年度青少年派遣の生徒達の体験発表

＊　友好の翼参加者・市民団体のマラソン交流･ソフトボール交流・婦人の会交流・障害者交流等々の交流を通して、相互理解と親善の深まりについての報告が行われた。

＊　エッセイコンテストの表彰式

大ホール「ホワイエ」に於いて、「友好の翼」第１回目～第 12 回目のパネル熱展示

「浦安親善人形交流の会」のオーランドへ渡った人形の写真展示・市民写真展などが展示され多くの市民が参加しました。

２．姉妹都市 15 周年記念エッセイコンテスト

浦安･オーランド在住の市民に「姉妹都市交流で知った異文化交流・理解の大切さ」をテーマに、市の広報紙で交流体験エッセイを募集しました。

最優秀になったのは米田喬氏で、オーランドからランナーズとして、ハーフマラソンに参加された市民との交流が浦安のランナーズクラブと姉妹都市クラブを結び、オーランドへ姉妹都市クラブ提携調印式参加、ホームステイを通じての交流などをエッセイにしたものでした。

オーランド市側のエッセイコンテストも同じテーマで募集をし、受賞者はクリス･ダニエル夫妻に決まり、賞金と賞状を授与しました。

３．第３回ユースアンバサダー招へい

2001 年９月 11 日の同時多発テロ事件以来、アメリカの青少年の来日はテロの危険性が指摘されていた為、オレンジ郡の教育委員会からの渡航許可がおりず、３年余り来日出来なかった Dr.･フィリップス高校から、「イベントなどへの招へいという形であれば、許可が得られえる。」との連絡があり、「明海大学」の日本語教育国際フォーラムのゲストスピーカに参加することで実現しました。またこれによりノースウェスト航空会社から姉妹都市事業をサポートする「ワールドスカラシップ･プログラム」に採用が決まり、高校生２人分の航空券を頂き、Dr･フィリップス高校から選ばれた Robert Oliver、Jr と Brittany Swapp　の２人が来日し、ホームステイを楽しみながら、行事に参加し、市民との交流など体験をしました。

３．７　浦安市の国際化の取り組みについて

元浦安市文化国際課長　和田　真

1990 年代を境として外国人市民の増加、IT 技術の革新などグローバル化が大きく進展し、世界のさまざまな出来事の影響を地域レベル、個人レベルで受けるようになりました。グローバル化によって日本から一歩も外に出なくとも、日々の生活のなかで異文化と向き合う機会が多くなっています。

浦安市もその例外ではなく、昭和 30 年(1955 年)に５人であった外国人の数は、昭和 55 年(1980 年)には 258 人、平成 19 年(2007 年) ２月には市の人口 157,107 人のうち 3,220 人(2.04%)と、県内において外国人市民の割合が非常に高く、出身国も 76 カ国にわたり、世界中の人が一緒に暮らしているまちになりました。

また、東京ディズニーリゾートを有することから、観光客や関係者など年間約 50 万人の外国人が浦安を訪れるなど、東京ベイエリアの国際色豊かな都市へと変貌しました。

本市の国際交流事業の実施にあたっては、事業を恒久的、かつ安定的に実施していくため、平成元年に３億円の国際交流基金を設置し、文化国際課を中心に全庁的な規模で事業を実施しています。

また、変貌著しい社会情勢に対応するため、浦安市では、「人が輝き躍動するまち・浦安」をまちづくりの基本目標に掲げ、平成 13 年(2001 年)に策定した『浦安市国際化指針』の具体的な施策に沿って、世界をつなぎ、多様な文化を受け入れるまちづくりを中心とした国際交流事業を推進しています。

１．浦安市国際化指針

(1) 策定の趣旨

本市に国際交流担当課が設置された昭和 60 年(1985 年)から、外国人相談窓口の設置や外国語資料の充実、市民主体の国際交流を推進するための「浦安市国際交流協会」、「浦安在住外国人会」への支援など、さまざまな施策を遂行してきました。国際交流基金の「地域交流振興賞」、「世界に開かれたまち」として（旧）自治大臣賞などを受賞してきたのも、これらの施策が評価された結果であると市では考えています。

21 世紀を迎え、国においても、地方においても、これからの日本や地域のあり方が、危機感をもって論議されています。また、インターネット等の普及により、瞬時に世界は影響しあい、地球はますます狭くなってきています。今後ますます国際関係に自治体や個人が大きく関わってくると思われます。中でも NGO（非政府組織）などの市民団体の活動は国際関係を大きく変える主体となってきています。

このような状況のなか、本市では、平成 11 年(1999 年)12 月に策定した「浦安市基本構想」において、「創造と交流で築く市民文化都市」を都市像のひとつとして掲げ、「市民がその能力を活かし、お互いの価値観を尊重し合いながら、個性を十分に発揮できる地域社会を築くことが重要」としています。

本市の国際化については、その活動が市民とともに活発に行われてきたことは確かですが、計画的に遂行されてきたとは言えなかった面もあります。そのため、21 世紀の浦安にふさわしい目標を設定し、それを実現するための施策を計画的に遂行するために、「浦安市国際化指針」を策定しました。

本指針の計画期間は、2001 年度から 2010 年度までの 10 年間としています。

⑵ 国際化指針の基本的な考え方について

私たちが住んでいる地球には、多くの国、多くの民族、多くの文化があります。さまざまな価値観が、時には融和し、時には対立しながら、多様な世界を形作っています。

また、地球的規模の問題の解決に向けて、国を越えて、多くの人々が協力しています。

私たちのまち浦安も、この地球の縮図のように、多くの文化や価値観を持った人々が住んでいます。市民一人ひとりがお互いを認め合い、理解し合うことによって、偏見や差別意識がなくなり、ともに安心して暮らせる地域社会をつくることができます。

浦安市は、**『多様な文化と多様な人々がともに支え創造するまち・浦安』**を国際化指針の基本理念として、「地球市民としての意識」「世界に開かれた地域社会」「市民主体の国際交流・国際協力」「ネットワークで広がる国際都市」の４つの基本目標をもとに、国際化施策を総合的･計画的に推進していきます。

２．本市の国際化への対応

本市では、国際化指針をもとに、さまざまな国際交流事業を推進しています。

⑴ 外国人相談窓口の設置

「外国人に住みやすいまちは、日本人にも住みやすいまち」を念頭に、平成元年（1989 年）６月１日に外国人相談窓口を市役所内（文化国際課内）に設置し、相談業務を行っています。窓口の開設時間は、月曜日から金曜日までの午前 10 時から午後４時まで（昼休憩を除く）となっています。本市相談窓口の特徴の一つとして、相談員（アドバイザー）がポーランド･台湾出身の在住外国人ということから､外国人としての自分の経験を活かしたアドバスが好評を得ています。（対応言語は、７ヶ国語）

また、相談内容は多種多様で、医療、福祉、税金、労働問題、国際結婚、住まい、ビザの相談、ドメスティックバイオレンスの相談、市の情報など生活全般に及んでいます。年間相談件数は 457 件（平成 17 年度実績）です。

⑵ 外国語資料の充実

市では、外国人市民のために外国語資料の充実に努めています。

日本語、英語、中国語、ハングルを併記した市民生活ガイドブック（平成 18 年６月より市ホームページ上にも載せています。）や英字広報「City News うらやす」の発行、日・英・中・ハングルを併記したガイドマップ浦安の発行、その他各種案内ガイド・パンフレット・申請書などの外国語版も作成しています。また、避難場所掲示板や観光案内版の英語併記なども行っています。

⑶ 国際理解事業の推進

地域でできる国際交流･協力活動を市民全体で考える「国際交流・協力フェスティバル」の開催や世界で活躍中の方を講師に迎え、英語による講演会「Our World Today」などを開催しています。市では、今後も日本人市民と外国人市民との交流を促進し、異文化理解を深めるための事業を推進していきます。

⑷ 国際交流･協力活動拠点の整備

本市国際交流・協力活動の拠点となる「国際センター」を平成 18 年（2006 年）４月１日に新浦安駅前市民プラザマーレ内に設置しました。

国際センターは、国際交流・協力に関する情報提供ならびに市民の相互交流を図ることを目的とした施設で

す。多文化共生社会を柱に地域密着型の講座･研修会の開催や市内国際交流・協力団体の情報発信の場などとして多くの方が利用しています。今後も外国人市民の日常生活をサポートするとともに、市民の幅広いネットワークづくりを支援していきます。

(5) 市民主体の国際交流･協力への支援

市では、本市国際交流の中核的な団体として幅広い活動を展開している「浦安市国際交流協会(UIFA)」と「浦安在住外国人会(UFRA)」を支援しています。両団体とも設立20周年を迎え、その実績・経験を活かした更なる活動の発展が期待されています。

(6) 外国人のための日本語教室

浦安市国際交流協会では、市内在住・在勤・在学の外国人のために「生活に慣れるための日本語」を教える日本語教室を行っています。学習希望者の希望時間帯とボランティアの提供できる時間帯を考慮して組み合わせ、マンツーマンまたはグループ学習(２～３人)で、受講者の学習目的にあわせたテキストを選択し、日本語を教えています。本市も多文化共生のまちづくり事業の一環として、本事業をサポートしています。

(7) 教育

市では、昭和54年(1979年)にALT(Assistant Language Teacher/英語指導助手) 1人を採用して以来、英語教育の充実に努めてきました。現在では、全市立小・中学校にALTを配置しており、小学校では、英語クラブや「総合的な学習の時間」等を担当、中学校ではALTの出身国の紹介や英会話の選択授業などの担当をしています。

今後も、児童・生徒の外国人とのコミュニケーション能力を育成していく方策の充実に努めていきます。

(8) 留学生への支援

浦安市は、明海大学、浦安市国際交流協会と連携をとりながら、日本文化体験などの事業を通して市民と留学生との交流を深めています。

市では、明海大学主催の「日本語スピーチコンテスト」の後援や「日本語教育国際フォーラム」の共催、明海大学留学生のホームステイ受け入れ家庭の募集、さらに英語による講演会の共催など、留学生との交流事業を推進しています。また、浦安市国際交流協会は、七夕祭り、お月見パーティー、ひな祭り、和菓子作り教室などの日本文化体験やホームステイ・ホームビジットの受け入れなど、年間を通した留学生交流を行っています。

今後とも、日本文化を留学生の若者たちに浸透させ、日本への理解を深めていただき、日本との友好関係の進展に大きな役割を果たしていただけるよう留学生交流事業を推進していきます。

(9) 姉妹都市交流

本市は、平成元年(1989年)10月23日にアメリカ合衆国フロリダ州オーランド市と姉妹提携を結びました。締結以来、市民主体の姉妹都市交流事業を推進しています。

一般公募により浦安市民をオーランド市へ派遣する友好の翼事業(浦安市国際交流協会への委託事業)の実施や市内の中・高校生をオーランド市へ派遣し、市民や青少年との交流を深めている浦安市青少年海外派遣事業、その他ランナー同士のマラソン交流や少年野球交流などスポーツを通した市民交流も行っています。

簡単ではございますが、以上が浦安市国際化指針をもとに進めている浦安市の国際化に対する取り組みです。

浦安市としましては、今後も引き続き、「国際都市・浦安」を築いていくとともに、多文化共生(国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認めあい、対等な関係を築こうとしながら、ともに生きていくこと)のまちづくりを推し進めていく方向です。そのためには、本市国際交流の中核的な団体として20年間の豊富な実績・経験をもつ浦安市国際交流協会の協力が必要不可欠であると考えています。

今後とも21世紀にふさわしい魅力ある浦安を築いていくために、本市の良きパートナーとして、より一層の御協力をお願いいたします。

４　UIFA部会活動の歩み

４．１　　言語学習部会

４．１．１　外国語学習講座

言語学習部会長　三浦　紘二

言語学習部会は2003年のUIFAの組織変更に伴い、従来の言語学習委員会と日本語ボランティア委員会が統合して新たに発足しました。

言語学習部会の中に、従来の言語学習委員会と日本語ボランティア委員会の活動を引き継ぐ、それぞれ外国語学習グループと日本語学習支援グループの二つのグループがあります。

日本語学習支援グループの活動については、別に４.１.２日本語学習支援教室として報告をしていますので参照してください。

外国語学習グループについては、従来の講座並びに講座以外の活動についても、委員会当時の活動をそのまま継続しています。本誌では1997年から2002年の間の言語学習委員会の活動と、2003年から2006年の間の言語学習部会・外国語学習グループ活動についてまとめて報告します。

１　語学講座の状況

96年前期には日本語講座３クラスを含む11言語16クラスの語学講座を開設していましたが、その後日本語およびタイ語講座が97年を最後に、ドイツ語講座も2001年を最後に講座を終了しています。いずれも受講希望者の減少によるものです。

この３講座以外の講座は現在まで安定して継続しています。特に、ハングル、中国語、インドネシア語、スペイン語、イタリア語などはいずれも初級講座に属するものですが、かなりの人気講座といえます。

ロシア語とフランス語については、必ずしも大勢の受講者を擁するとはいえませんが、今後も引き続き講座が開けることを期待しています。

英語については、2006年現在、入門コースから、初・中級コースまでありますが、最近のトレンドとしては、

入門コースより少しレベルの高い講座が人気になりつつあります。

1996 年から 2006 年までの受講生の数と講座の数は表４．１に示しました。講座の変遷については表４．２に示したとおりです。

なお、本年度から、ほとんどの講座の会場が新浦安駅前に新設されたプラザ・マーレ内の国際センターに移り、交通の便が良くなったこともあり、受講希望者が増えているようです。

また、団塊の世代の大量退職時代を迎え、これらの人たちのニーズも考え、語学講座の構成についても検討を必要とする時期を迎えたと判断しています。

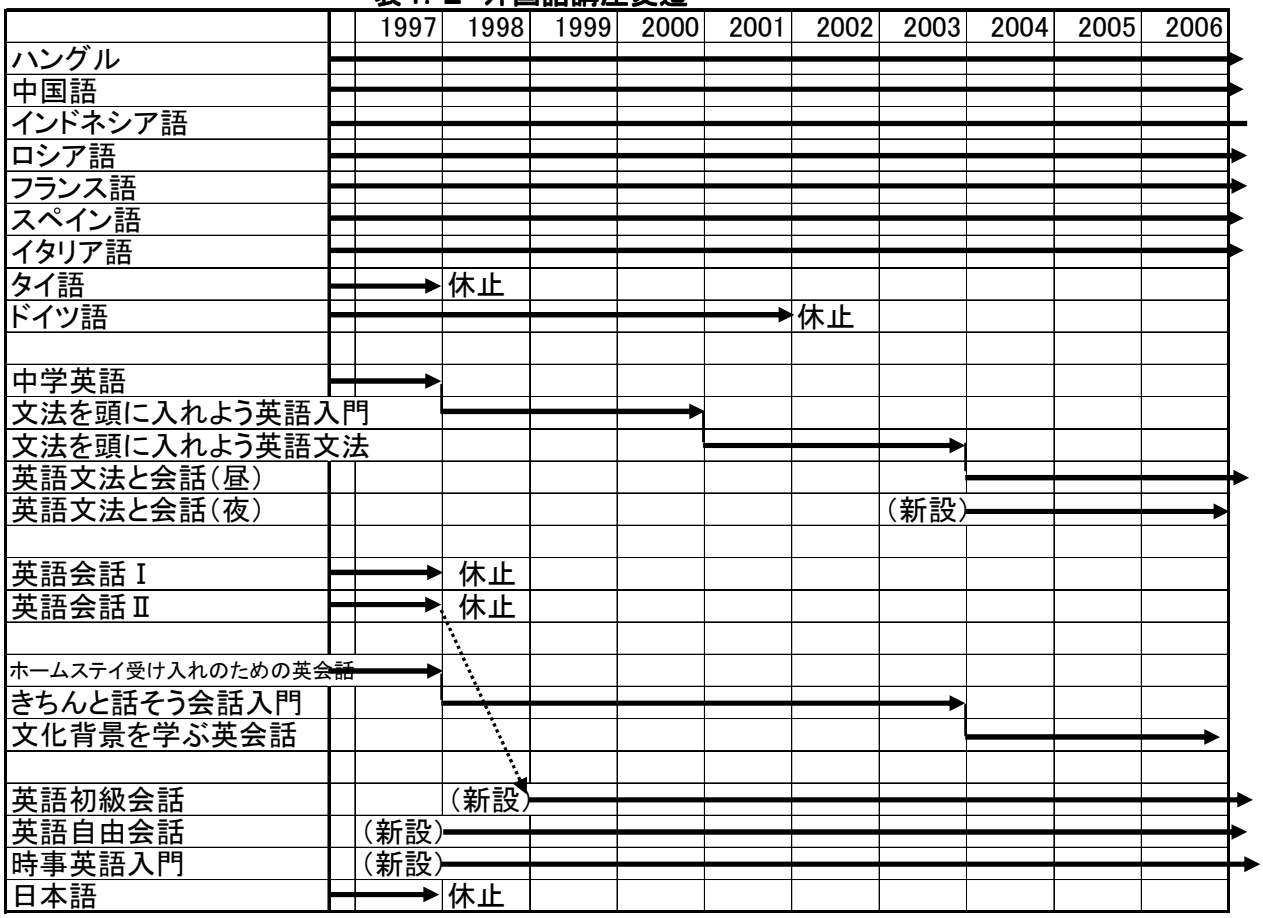
これらの環境変化に機敏に対処しながら語学講座をますます発展させていきたいと考えています。

表4．１　受講生の数と講座の数

	1997		1998		1999		2000		2001	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
講座数	15	13	12	12	13	13	13	13	13	13
受講生人数	168	163	185	170	191	179	215	191	200	188
平均受講生人数	11.2	12.5	15.4	14.2	14.7	13.8	16.5	14.7	15.4	14.5

	2002		2003		2004		2005		2006	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
講座数	12	12	12	12	12	12	13	13	13	13
受講生人数	215	181	174	166	231	203	192	185	214	204
平均受講生人数	17.9	15.1	14.5	13.8	19.3	16.9	14.8	14.2	16.5	15.7

表4．２　外国語講座変遷



2　語学講座以外の主な活動

（1）特別公開講座

語学研修委員会では開設翌年の 1988 年以来、毎年時宜にかなった内容の講座を一般市民に公開する形で開催しています。（表４．３　特別公開講座）

（2）語研フェスティバル

毎年、一年間の語学講座が終了する３月に語研フェスティバルを開いています。

目的としては、

受講生と他のクラスの受講生や講師の方々との交流

受講生の学習成果発表

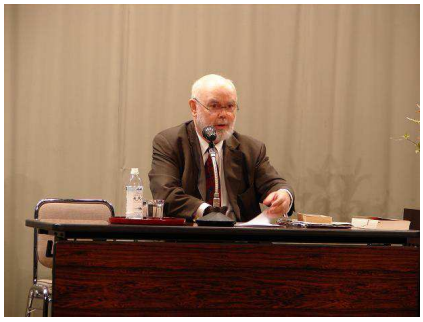
語学研修活動の UIFA 内外への紹介

などです。

原則としてすべての講座学習者が何らかの発表を行うこととしておりますが、発表の主なものは寸劇、歌、学習していることばに関したクイズなどが中心です。

語研フェスティバルは、語学講座開設以来毎年行っており、2006 年には UIFA と同じ第 20 回のフェスティバルを迎えることになりますので、「UIFA20 周年記念語研フェスティバル」として従来以上に大勢の参加を得て、楽しく開催したいと準備しています。

ただ、最近若干マンネリ化していることと、学習者の中から、講座準備のために授業がつぶれるなどの理由で消極的な人が増えていることもあり、また、目的の一つである、他の学習者や講師との交流が必ずしも充分にできないなどの問題も見えており、実施方法その他見直しの時期にかかっていることは事実です。



特別公開講座（2005）

語研フェスティバル（2007.3 月）

授業風景

表4．3 特別公開講座

1997	1　韓国の家庭料理」講習会　元ハングル講座講師　金田明姫氏 2 「アジア民族服飾の旅」文化女子大学教授　道明　三保子氏 衣は人間生活の基本要素であり、装いの文化は人類共通の生活感情を反映すると共に、気候風土・生活様式・風習・宗教・身分・階級・性別・時代文化交流などによって、それぞれの地域や民族ごとに独特のものを生み出してきました。風土に合わせて衣装の形式が決まってきたこと、日本、中国・モンゴル、韓国、タイ山岳民族、インド、イラン、パレスチナなどの民族衣装・伝統的衣服等について講演された。 3　英語による特別講座　“In the light of Rembrandt” 毎年開催している「英語による特別講座」シリーズで今回は昨年フェルメールについての講演をしていただいた、アムステルダム国立博物館元ガイドのロンネケ・デラマー氏により、たくさんのスライドを使ってレンブラントについての講演が行われた。
1998	「中国古典芸術鑑賞」 台北の故宮博物院の文物解説と中国民俗音楽の解説と演奏の2部構成で行われた。
1999	「ベチャから眺めたインドネシア」　インドネシア語講座受講生　佐々木宏一氏 30年間続いたスカルノ大統領の退陣、ハビビ副大統領の就任、さらに翌99年にはワヒド大統領が就任するなどインドネシアでは政治情勢の大きな変動があったときです。また、99年8月には東チモールの独立についての投票、開票直後からの独立反対派による破壊・暴力行為の急増で現地情勢が急激に悪化したこともあり、インドネシア情勢が毎日のようにニュースに流れていた年でした。 佐々木氏はインドネシア滞在中の現地における生活体験を下に身近な話題を中心に講演を行った。
2000	「知られざるイタリア探訪」イタリア語講座講師　伊藤　進氏 年間90万人もの日本人が観光に訪れるイタリアについての講演会が行われた。 イタリアの歴史を概説し、イタリア人の考え方、価値観が歴史に基づくこと、また南北でかなりの経済格差があること、人種も違うために南北問題が存在することなど、ガイドブックでは知りえないイタリア人の姿を紹介してもらえた。
2001	「岐路に立つか　アメリカ経済」時事英語入門講座講師　新居　嗣朗氏 「ニューエコノミー時代到来」と称されて、一人全盛を謳歌してきた米国経済が息切れしてきたやに見えたとき「同時多発テロ」が2001年9月11日に発生し、果たして米国経済はこの後どうなるのか、という問題に新居氏はいろいろな経済指標を使いながら解説された。
2002	1　「ペルー料理について」宮城　スサナ氏 2　「漂流民」山内　孝　氏 3　「タイ文化」大塩ﾌﾟﾗﾆｰ　全６回
2003	「トルコの見方」　横浜国大教授　西脇　保氏（浦安市在住） 2003年は「日本におけるトルコ年」で8月には「トルコ三大文明展」が東京で開催された。 講演では、トルコの歴史、地域事情、現在の社会状況などをスライドを使って説明された。
2004	「韓国、遠い国？近い国？」金　東俊氏 「冬のソナタ」で日本中が韓国ブームとなったこの年は1961年に来日し、その後今日まで終始韓国語教育に携わってこられた　金　東俊氏を招いて韓国の衣・食・住・家族関係・言語等を点描しながら日本のそれらと比較しながら説明していただいた。
2005	「ドイツの戦後６０年」ジャーナリスト　ゲプハルト・ヒールシャー氏 「日本におけるドイツ年」にあたるこの年は、昭和30年代から日本で活躍しているドイツ人ジャーナリスト　ゲプハルト・フィルシャー氏に、「ドイツの戦後60年」と言う演題で講演をしていただいた。 たまたま、ドイツで連邦議会選挙後に、シュレーダー首相からメルケル党首を首班とする大連立政権に移行したことでニュースをにぎわしていたこともあり、ドイツ政局の解説から始まり、戦後60年の活動を日本のそれと比較しながら説明された。
2006	在日ベトナム人が語る「現在ベトナムの等身大」　森　絵里咲　氏 最近では日本からの観光客も増大しているベトナムの状況を、在日ベトナム人の森　絵里咲氏に解説していただいた。

４．１．２　日本語学習支援教室

前言語学習部会副部会長　田中　千恵子

外国人に日本語を学んでもらう活動は、語学研修委員会で1987年９月に開催された最初の語学講座（10言語、18講座）の中に、「外国人のための日本語」講座としてスタートしました。

この講座は、入門コース、初級１コース、初級２コースの３クラスを持ち当初はそれなりの受講生を擁していましたが、日本語学習グループの活動が1995年から開始されるとともに受講者が次第に減少し1997年に講座を閉止しています。

一方、来日後間もない外国人に対し、生活日本語を学んでもらうための活動は、1994年に浦安市が主催して開催した日本語指導ボランティア養成講座終了後、この講座の参加者と、それまで市内の小学校などで日本語指導をしてきた方々が集まり、「外国人のためのボランティアグループ」を作ろうという動きになり、市の外国人相談窓口の方々の意見も聞きながら、1995年２月からすこしずつ活動が開始されました。

この活動は、UIFAの中では、95年の５月から正式に「在住外国人交流委員会」の事業として位置づけられボランティアグループのスタッフは委員として在住外国人交流委員会に参加することになりました。最初の活動は、受講者19名、ボランティア登録者23名でした。

日本語ボランティアグループの活動に対しての関心は高く、はじめの２年間に受講希望者131名、ボランティア登録者60名の方から、事務局に連絡があったとの記録があります。

学習形態については、初めからマンツーマン形式を前提に進めていましたが、学習場所や学習時間などについては、当初はボランティアごとにバラバラでしたが、これも徐々に整理されて現在のように教室を決めて、決められた時間に学習する形に整理されてきました。

1998年には、ボランティアの人員の拡充および質の向上を目的に、プロの日本語教師による「日本語ボランティアを始める人のための講座」を開催しました。

また、学習形態がマンツーマン形式であるために普段はできない、学習者同士や担当以外のボランティアと交流することなどを目的に1999年には新しい試みとして「日本語サロン」を発足しました。このサロンでは、日本語のみならず時には母語でそれぞれの国の文化などについても話ができ、受講者・ボランティア双方にとって楽しい時間を持つことができました。

2000年には学習場所は、401会議室、富岡公民館、当代島公民館の３箇所７教室とし、それぞれの教室担当者を決めました。学習時間も毎週月曜から金曜に設定し、学習者、受講者双方にとって便利な時間を選択することができるようになりました。年間登録者数は延べ150名を超え、学習場所に入りきれない事態も起こりました。

2001年５月のUIFA総会で、日本語ボランティアグループは「在住外国人交流委員会」から分離独立して、「日本語ボランティア委員会」が発足しました。

2002年度の総会でUIFAの組織を、従来の委員会制度から４部会制にすることが決定し、日本語ボランティアの活動は「言語学習部会」に所属することになりました。

2003年

UIFAの組織変更に伴い、「日本語学習支援グループ」として新たなスタートが始まりました。

これまでの401会議室、富岡公民館、当代島公民館に加え、美浜公民館を増設し、９教室の活動を効果的に進めるために、教室責任者を置き、教室のまとまりを強化しました。

2004年には、各教室のまとまりはさらに確かなものになり、通常の学習以外の活動も活発になりました。この年、日本語ボランティア登録者は全員【部会員】といたしました。

2005年には、学習者・ボランティアの人数も定着し、９つの教室別運営はさらに安定し、大きなグループとなりました。

大きくなった日本語グループ内の認識の共通化、明確化実現のため、スタッフ全員で現状を分析・見直しをして、「日本語グループ規約」と「教室運営マニュアル」を作り、組織の充実とスタッフ事務の標準化を図りました。これにより、各スタッフの円滑かつ効果的な運営が実現いたしました。

また、学習者向けに６ケ国語翻訳による教室案内も作成し、学習者への対応が改善されました。

2005年３月時点での活動ボランティア数は75名、活動学習者数は91名でした。

2006年

本年度からは活動場所は、一部の教室が国際センターに移り、富岡公民館、当代島公民館、401会議室の４ケ所９教室になりました。

従来、学習者の年間登録料は1,000円でしたが、今年度より受講料として月当たり300円、半年毎1,800円となりましたが、交通の便が良くなったことで、受講希望者は増えています。

さらに受講料の徴収方法の改正と日本語学習支援グループ会計年度をＵＩＦＡの会計年度に合わせるために、2006年度は調整年としました。

時代のニーズに応え、日本語学習支援グループのホームページを立ち上げ、日本人及び外国人市民の方に日本語支援教室の案内も始めました。

2006年12月現在、登録ボランティア数　114名　　登録学習者数は　96名です。

外国人市民にとって、この浦安がより住みやすく、やさしい街となるよう、日本語支援教室の活動はこれからもますます活発に展開されていくことが期待されています。

日本語ボランティア揺籃期について

元副会長　梅原祥子

1994年6月から9月にかけて、今もお世話になっている松本明子先生を講師に［日本語指導ボランティア講座］が開かれたのは、記録にあるとおりです。受講中から主催者の国際交流課の修了後の意向がわからないまま、しびれを切らして受講者有志（UIFAのいろんな委員会所属者と一般の方）が話し合いを重ね、初会合を10月31日に開きました。語学研修委員会の方・総務の方なども交えて話し合いましたが、語学研修委員会のプロの講師による有料の講座もすでに開かれていたこともあり、準備期間中も発足後も、有料か無料か、有償か無償か、教える人に資格を必要とするか否か、そのほかボランティアについての考え方もいろいろでした。

しかし外国人居住者の多い浦安では、UIFAにとって外国人の生活支援は大切なこと、いえ使命とも言えるのではないかという気持ちが強く、まず生活の中のコミュニケーション能力獲得の支援ということを目的にして進め、その後ボランティアや受講者間の交流をはかるため、「にほんごなかま」の発行やサロンの開催をしました。時には言葉の支援だけにとどまらず、個人的なお付き合いに発展したり（結婚した人も）、中国残留孤児の家族のために進学のお手伝いをした方もありました。口コミで都内在住の受講希望者もあり、東京日本語ボランティアネットワークのご指導を得て、ボランティアガイドに掲載してもらったり、県の国際交流協会の講座に出たり通信教育を受けたりと個人的にもレベルアップに努めながら裏方に徹するコーディネーター役や、スタッフの方の手探り手作りで文字通りのよちよち歩きだったと、今素敵なホームページで活動を拝見して感無量です。

現在福祉行政に関わっていますが、情報障がい者である在住外国人のための日本語ボランティアの活動も、地域福祉活動といえるのではないでしょうか。

４．２　　文化交流部会

文化交流部会　副会長　永末　美智子

文化交流部会は2003年のUIFAの組織変更に伴い、従来の比較文化研究委員会と在住外国人交流委員会が統合して新たに発足しました。

統合後初めての年である2003年度の部会の活動実績は以下のとおりでした。

５月	日本文化研修	本格的な茶会の勉強
６月	明海大学短期留学生の歓迎会	
７月	明海大学留学生の七夕の会	浴衣の着付け　琴演奏
８月	UFRA　会員の故郷の少年少女コーラスの後援	
10月	日帰り研修	大多喜城
10月	明海大学留学生月見の会	
11月	UFRAとの一泊研修	裏磐梯の地理と歴史（五色沼、野口英世記念館，飯盛山）
２月	ひな祭り	人形飾りと日本文化の紹介
３月	外国食文化研修	インドカレー
３月	日本食文化研修	和菓子

これらの事業は、ほとんど前身の比較文化研究委員会と在住外国人交流委員会の事業を引き継いだものでしたが、いずれの事業も全員一致で計画通り実行することができ、無事統合第一年を乗り切ることができました。

このため次年度以降についても、明海大学留学生との交流会、UFRA との一泊研修、外国文化研修、日本文化研修を当部会の基本事業として位置づける事としました。

2004 年度

UIFA は 1993 年から UIFA の全体事業として、「アセアン青年招へい事業」を行っていましたが、UIFA を巡る予算環境が大きく変わり、この事業を 2002 年に終了し、新体制移管後の 2004 年からはこれに代わり JICA の行う青年招へい事業の協力を行うことになりました。

これらの UIFA 内の横断事業については従来各委員会から若干名宛委員が出て実行委員会を開設し対応していましたが、新体制下では文化交流部会の担当とされていました。

ただ、新たに開始する JICA 事業については、文化交流部会だけで行うことは難しいとして、UIFA 内で再検討の結果、文化交流部会を主要メンバーとした実行委員会で実施することになりました。

この JICA 事業には２泊３日のホームステイが必須条件となっていましたが、新体制ではホームステイの管理は、総務・研修部会の担当となっていました。

しかしながら、総務・研修部会のホームステイ管理は、名簿管理のみを行うと言う事であることが分かり、それでは先々実際に事業が実行される段階で問題を起こす恐れがあると思われ、この担当を文化交流部会へ移管することを提案し、運営会議の承認を得ました。

新体制第２年度の 2004 年度は、JICA 事業受け入れの初仕事として、マレイシアの地方公務員 22 名の受け入れを当部会が全力を挙げて実行いたしました。

イスラムの戒律や習慣など、あるいはホームステイ受け入れ態勢の準備などいろいろ苦心がありましたが、本部・三役、文化国際課の全面協力や各方面の支援を受けて無事乗り切ることができました。

この年は、JICA 事業の受け入れのほかに、基本的な事業として、明海大学留学生交流の七夕の会や月見の会。またオーランドに派遣される青少年海外派遣生に茶道、振袖や袴の着付けの日本文化体験も行いました。UFRA と、昇仙峡、県立美術館、河口湖を巡る一泊研修旅行、外国文化研修として、社交ダンス講習会、インドカレーの料理講習会などを開きました。

このほか日本食文化研修として中秋の名月に因んだ点心料理や、祭り寿司、さらに日本文化研究の一環として「能楽の誘い」を企画して大変好評でした。

またJICA事業に関連して50名に上るホストファミリーのリストアップもできました。

2005 年度は、フィリピンからの JICA 事業受け入れの仕事があり当部会では、フィリピン青年たちの日本文化体験を担当しました。また、ホームステイ受け入れも２年目ということで、滞りなく行うことができました。

当年度も、明海大学留学生交流として七夕の会やお正月の雑煮つくり、また青少年海外派遣生の日本文化体験

もしました。日本文化研究として学習院大学の落語研究会による公演、ひな祭りにちなんだ和菓子つくり、外国文化研修としてドイツおもてなし料理、さらにダンス講習会ならびに UFRA 共催でダンス発表会も開催しています。

UFRA とは，合同一泊研修（水上,匠の里，奈良保ダム）も実施しています。

いずれの企画も大勢の参加者を得ることができました。

2006 年度はバングラデシュからの JICA 事業の仕事があり、当部会では日本文化体験、ホームスティを担当しました。

今年度も、明海大学留学生交流、UFRA との合同日帰り研修（奥多摩、青梅）およびダンス交流会、外国文化研修として、バングラデシュ大使館書記官による講演会、ドイツ家庭料理講習会、日本文化研修として和菓子作り、日本刺繍講習などを実施しました。

当部会としては、これらの行事を全員一致して活動を続けていますが、これらの事業の企画・実行・反省・報告の全過程を終了したときの感動には言い知れぬ喜びがあります。

UIFA 内外のかたがたの積極的な参加をお待ちしています。

４．３　　姉妹都市交流部会（友好の翼事業）

元姉妹都市交流部会長　徳田八郎衛

（1）　UIFA の役割

友好の翼とは「誰でも参加できる」ことを謳い文句とした姉妹都市オーランド訪問の市民ツアーである。市の主催であるが、当協会に計画や実施を委託された事業であり、協会の役割拡大という意味でも画期的な事業の始まりであった。全国どの都市でも類似のツアーは行われているが、その大半は旅行業者への丸投げであり、基本計画も市役所が立案していた。浦安市の場合、市役所が当協会に示したのは、「毎年１回、40 名で実施」という事項だけで、後の条件は当協会の検討と選択に任された。40 名というのは、１台のバスを借り上げるのに最適の人数である。より少数の人数を年に複数回派遣するのは、姉妹都市探訪や交流の目的徹底には好ましいが、効率が悪くて割高になるので採用されなかった。また「一人でも多くの市民に姉妹都市を知ってもらう」趣旨により、一人に５万円の補助が浦安市から支弁されたが、その代わり２回以上の参加は認められなかった。しかし 90 年代は円高が続き、また 1999 年度の第９回翼では 100 名のツアーにするためレピーターの応募も認めたので、この回から５万円補助は打ち切りとなった。だが現地での公式訪問経費（借り上げバス・通訳経費、交流経費等）は、今も市からの助成金で賄われている。旅費や宿泊費は、当初も今も参加者の個人負担である。

1990 年の第１回友好の翼を計画するにあたって、当協会が深く論議・調査したのは次の３点であった。

① 「誰でも参加できる」とは？

誰でも参加できるツアーといっても、行動の不自由な人が加われば効率が悪くなり、健康な参加者から不満も出る。また、「今生の想い出に」参加して「姉妹都市で客死」されては、本人は本望でも周囲は大迷惑である。そこで参加者の年齢制限について真剣に議論されたが、高齢でも壮健、60 歳前後でも旅先で入院する事例には事欠かない。そこで参加者募集要項には「団体行動のできる健康な方」と記載するのに留め、車椅子等の利用者は、実行委員や市役所職員の介添を当てにせず、家族の同行を求めることになった。

だが第１回友好の翼は、午前の公式訪問の後でホテルに戻り、昼寝の時間まで準備するという時間効率の悪いツアーとなり、ヤングはもちろんのこと壮年層からも「老人向きのツアー」と批判され、第２回以降では「昼寝時間」は、姿を消した。

② 最適の実施時期は？

現地は暑いので、夏場はディズニー観光客も減りホテル代は安くなるが、バカンスの夏には航空運賃が高い。冬場は逆で、航空運賃は安いが、現地のホテルは避寒客で込むから 40 名の予約も難しく、宿泊費も高い。そこで夏場をやや避けた９月案と正月後の運賃格安を狙った１～２月案が比較討議された。そこへ、夏場と冬場の中間、11 月に実施してみては？という助言が旅行業者から提案された。11 月には市および協会の大きな行事がなく、またオーランド側も支障がないということで、11 月の実施となった。

だが晩秋の日照時間は短く、特に第２回では帰路、ワシントン D.C.での一泊を追加したが 16 時過ぎには落日となるので、ゆっくり史跡探訪もできない。そこで第３回からは長所も短所も検討済みの９月が選ばれ、幸いハリケーンにも遭わないまま、第８回まで踏襲された。ところが第９回は、姉妹都市提携 10 周年記念とあって提携調印式を偲ぶ 2001 年２月に実施され（実際の調印式は１月 27 日）、それ以来、２月実施が定着している。

③ 何日間のツアーとするか？

ツアー日数は、ツアー経費にも大きく関係する。長い日数であれば、高所得者対象、暇な人対象のツアーとなるから「誰でも参加できる」趣旨に反することになる。そこで勤め人でも参加できる１週間ツアー、すなわち標準的な休暇で参加できるツアーとした。そして出来ればツアー最終日に、不可能なら中間に祝日が来るように設定し、実際には８日間のツアーとした。これによって現地６泊が可能となり、公的訪問２日、自由行動３日が確保できた。特に９月実施の頃は、１週間の連続夏休みを９月末までに請求できる職場の勤務者が多数参加して、参加者の平均年齢が若返るという現象も見られた。

なお、往路、あるいは帰路、ワシントンやアトランタで一泊するため１日延長し、９日ツアーで設定した年もある。ホテルの格についても、「誰でも参加できる」方針に従い、中の上・上の下を選択した。だが最初は高級なホテルが多く、参加経費は 20 万円以上であったが、第４回、第５回頃から実行委員自らが旅行業者の入札を審査するようになり、ある時期には 13 万円程度にまで軽減された。

３ 翼の移り変わり

第１回友好の翼以来の実施時期と参加者数のトレンドは次の通りである。根拠は協会ニュース（ニューズレター）であり、40 名以上という記録は、事務局員も含めている場合がある。

1991.11.17-11.24　第１回　40 名（うち UIFA３名）、これ以外に事務局から２名
1992.11.21-11.29　第２回　37 名　ワシントンで１泊
1993.9.11-9.19　第３回　40 名　ワシントンで２泊
1994.9.21-9.28　第４回　39 名　Dr.フィリップス高校で浦安デー開催、人形交流開始
1995.9.13-9.20　第５回　47 名
1996.9.04-9.12　第６回　38 名　アトランタで１泊
1997.9.22-9.30　第７回　41 名　ワシントンで１泊
1998.9.23-10.01　第８回　45 名
2000.2.09-2.16　第９回　100 名
2001.2.07-2.14　第 10 回　43 名
2003.2.05-2.13　第 11 回　41 名　ワシントンで１泊
2004.2.04-2.11　第 12 回　30 名
2005.2.09-2.16　第 13 回　37 名
2006.2.15-2.22　第 14 回　24 名

市民交流（友好の翼）と教育交流とが結びつくのが、Dr. フィリップス高校で実施する日本文化紹介の「ジャパン・ナイト（かつてはウラヤス・ナイトとも呼称）」であり、同校の生徒や保護者の協力で実施されるホーム・ビジットである。どちらの側にも、ワクワクする異文化交流であった。

ジャパンナイトでの書道体験

ホームビジット

「姉妹都市オーランドについて」

1　二つのオーランド

狭義のオーランド：浦安とほぼ同人口を有するオーランド市あるいは市域を意味する。

広義のオーランド：グレーター・オーランド、あるいはメトロ・オーランドと称される都市圏を意味する。具体的にはフロリダ州オレンジ郡、セミノール郡、レイク郡（湖水郡）、オセオラ郡から成る地域で、ほぼ 80 万の人口を有する。

7 つの姉妹都市を示す方位盤

２　オーランドの姉妹都市

世界の観光都市７つ、すなわち台南、桂林、浦安、レイキャネスベア（アイスランド）、モントレイ（メキシコ）、クリティバ（ブラジル）、オレンブルグ（ロシア）と姉妹提携している。市の中心部にあるイオラ湖の湖畔には、７つの姉妹都市の方位を示す矢印が立っている。

３　議員の重み

市長不在時に市長を表敬すると６つの選挙区から選出された６人の議員の先任者が市長の代行を務める。彼らは市政全般に発言するが、自己の選挙区においては、日本の自治会長と同じような立場で住民へのサービスに努める。議員報酬はわずかであり、議員の職務は奉仕作業である。各人が職業を持っているので、市議会は夜や休日に開催される。

４　オレンジ郡立ドクター・フィリップス高校

創立者の名前ではなく、かつて、この広大な土地を所有していた医者の名前である。

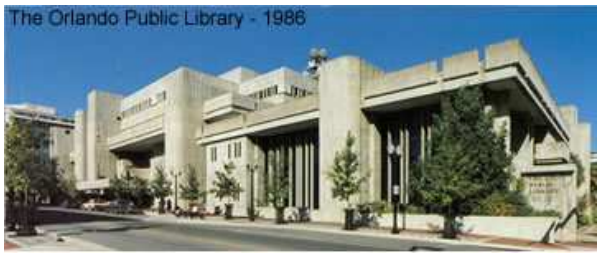
キャンパスは 80 ｴｰｶｰ（32 万平方メートル）でオレンジ郡の学校では最大であり、北と南のキャンパスに分離している。道路を挟んでユニバーサル・スタディオがあり、5 マイル南にはシーワールドがある。

同校の自慢は国際学習センター(CIS)で、1980 年代から日本語と日本文化の教育を行っている。言語・文化は選択性であり、1 年だけでもよいが 4 年続ける生徒もいる。4 年、日本語を受講した生徒であれば、ある程度の日本語（単語）は知っている

１年は４つの短い学期（Marking Period）に分かれ、各学期間に短い休暇がある。長いのは６月から８月中旬まで２ヶ月半の暑中休暇であるが、まだ暑い８月中旬に新学期を始める習慣が疑問視され、フロリダ州では、2008 年から 9 月 1 日に新学期が始まることになった。なお、フロリダ州の教育制度は 6･3･3 制ではなく 5･3･4 制である。

５　オレンジ郡図書館システム・中央図書館（オーランド市役所の近く）

フロリダ州の中で最大の図書館であり、中国語・韓国語・日本語・アラビア語等の図書コーナーもある。100 冊ほどの和書の大半は発行後 20 年ほどの古いものであったので、姉妹都市提携 5 周年に浦安図書館の協力で和書 200 冊贈呈し、15 周年には伝統工芸・建築の写真集 81 冊を贈呈した。なお、日本では郡は地名の一部となり、行政組織ではなくなったが、米国では小中高校運営・図書館・道路保守・重要な警察業務（保安官）は郡が実施している。



上　オレンジ郡図書館

左　ロケットの森

４．４　　総務・研修部会

総務・研修部会長　大野　佑子

４．４．１　　総務・研修部会の活動

2003 年の UIFA の組織変更に伴い、従来の総務委員会、広報委員会、講演・シンポジウム委員会ならびにホームビジット委員会の一部業務を新しく発足した総務・研修部会が担当することになりました。

当部会の業務としては、UIFA の対外的な窓口業務や会員管理、ならびに総会・年末交流会の主催ならびに市主催の市民祭り、国際交流・協力フェスティバルなどの協会窓口としての機能を果たしています。また他の団体との協力事業として「スポーツフェアー」も担当しています。

広報業務としては、UIFA 広報誌「UIFA newsletter」を従来どおり年 4 回発行するほかに「ホームページ」を立ち上げ、その後の管理を各部会と共同で行っています。「UIFA newsletter」については 71 号から一部カラー化をはかり、またタイトルを「浦安市国際交流協会ニュース」と日本語表示とし、市民に親しみやすいものとしています。内容的には、予定記事を中心に、かつ写真を増やし、また必要な記事についてはルビを振るなど、市内在住の外国人にも配慮しています。

創立 20 周年記念講演会　磯村　尚徳 氏

定期総会を毎年 5 月に開催し、また総会終了後には総会記念講演会を開催しています。年末には、年末交流会を開催し、合わせて講演会・シンポジウム・催し物を開催しています。

「**4.4.2 総会記念講演会**」、「**4.4.3 イヤーエンド シンポジウム**」を参照してください。

なお、ホームビジット委員会の業務を引き継いでホームステイ受け入れ家庭の登録管理を当初、当部会でおこなっていましたが、本業務については、その後文化交流部会に移管することになりました。

上述した、市民祭り、国際交流・協力フェスティバルおよび年末交流会（イヤーエンドパーティー）等については、総務・研修部会は窓口業務と支援を行うこととし、実際の企画・運営は三役をはじめ、部会員、会員の協力で行われる実行委員会を組織して、この実行委員会で行うことしています。

なお、当部会としては、「地域の交流のあり方を考える」をテーマに在住外国人のためのふれあいの場所として、月一回“地域交流サロン”（日・祭日を除く毎第３月曜日)の開催を決定しました。あわせて、七夕祭り、ひな祭りも開催を予定しています。

４．４．２　　総会記念講演会

年　月　日	演　題　および　講　演　者
87.04.04	「国際交流について」　竹村　均　氏
88.04.30	「地方の国際化その課題と使命」　外務省外務報道官　松田慶文
89.5.13	懇親会およびパネル展示
90.5.12	「英語の勉強もう一つのアプローチ」明海大学　鈴木進教授
91.05.11	「身近な日本語の話」明海大学教授　山口仲美氏
92.05.23	「これだけは知っておきたいエイズの最新情報」千葉大学　武田敏教授
93.05.22	「昼下がりのワイン談義」　ブライトンホテルソムリエ　浅田勝美氏
94.05.21	「ニュースではわからないアメリカ人の普通の暮らし」 チャールス・ウイップル氏（NHK「やさしいビジネス英語」元講師）
95.05.13	「浦安の防災について」浦安市総務部防災課長　星野　隆氏
96.05.18	「シンプル　イズ　ベスト」ジョン海山ネプチューン氏
97.05.17	パネルディスカッション：やさしい国際交流 毛受　敏浩、鷹栖　明、吉原　トシ、平山　クリスティーナ、梅原　祥子
98.05.16	「アセアンは今」－日本との関係において－ 野呂雅彦　国際交流基金アジアセンター事業部長
99.05.15	姉妹都市10周年記念プレ・イベント タイトル：浦安―オーランド交流のあゆみ・・・そしてこれから
00.05.20	懇親会：姉妹都市提携10周年記念事業報告会、委員会活動報告
01.05.19	「国境なき医師団とは？」寺田朗子　特定非営利活動法人　国境なき医師団日本　会長
02.05.18	「ユニセフとアフガンの子供たち」郡　玲治（ユニセフ協力事業部）
03.05.17	新体制による部会説明及び交流会
04.05.15	「ロシアとどうつきあうか」木村　汎　北海道大学名誉教授
05.05.14	「激動の国際情勢と日本経済」渡辺正太郎　経済同友会副代表幹事専務理事
06.05.20	「世界史を変える日本のマンガ」岡田真樹　外務省広報文化交流部長
07.05.12	科学の力で領土を広げる――資源大国への道――　谷　伸〔内閣参事官〕

４．４．３　イヤーエンド シンポジウム

年　月　日	内　　容
88.12.04	**ミニトークとイヤーエンドパーティー** 基調講演「サロン交流と街づくり」 パネルディスカッション「浦安に、そしてUIFAに期待するもの」
89.12.10	**イヤーエンドパーティー&シンポジウム** 「姉妹都市交流で何ができるか」「高齢化社会と国際交流」「舞浜リゾート活用法」の３つに分かれて参加者全員が熱のこもった意見を出し合った。
90.12.02	**イヤーエンドパーティー&シンポジウム** 第１分科会　21世紀に向けての国際交流はどうあったらよいか 第２分科会　来年の国際交流フェスティバルに向けてのアイデア 第３分科会　浦安コレクション　「アーバンリゾートファッション」の可能性はあるか
91.12.14	**イヤーエンドシンポジウム&パーティー** 第１分科会　UIFAって一体何でしょう 第２分科会　在住外国人との望ましいふれあい 第３分科会　ホームステイを受け入れて
92.12.05	**イヤーエンドシンポジウム&パーティー** １　「ニッポン社会では何故こんなに肩がこるのか」 パネラー：金　慶敏氏　漢陽大学政治学部講師兼国際協力部副部長 熊谷　重信氏　UIFA会員 ２　「海外旅行を安く楽しむ方法」 パネラー：勝又直人氏　近畿日本ツーリスト国際業務副部長 松原　弘典氏　UIFA会員
93.12.04	**イヤーエンドシンポジウム&パーティー** 「10年後の国際都市浦安とＵＩＦＡを語ろう」 「アセアンの学生が語る－想像の日本と現実の日本」
94.11.26	**イヤーエンドシンポジウム&パーティー** １「姉妹都市交流、これまでの５年間、これからの５年間」 基調報告　徳田八郎衛　「姉妹都市交流、理想と現実」 舟田園子「図書館ボランティア、マラソンランナーの交流」 小尾幹男　「青少年の国際交流」 大野田陽子　「オーランドでの英語教員語学研修と学校における国際理解教育」 ２「私にできる国際協力」 岡村真理子氏（すべての子供たちに教育の機会を＝カンボジアに学校を贈る会）、 出向ボランティアとしてカンボジアで１年間生活。 西崎紫織氏（西崎流舞踊教授）、踊りを通しての国際交流 牧口哲英氏（浦安市歯科医師会）海外医療派遣団に参加して、フィリッピンのセブ島 で現地住民900人の治療をおこなった。

95.12.02	**イヤーエンドシンポジウム&パーティー** 「UIFA の社会への役立ちを見つめ直そう（国際交流の目指すもの）」 UIFA から活動の現状と役割・効果等についての報告があり、その後 “UIFA の活気が無くなった”、“UIFA はつまらない”、“UIFA 明日への期待” などのテーマでディスカッションを行った。
96.12.08	**UIFA 設立 10 周年記念イヤーエンドパーティー** （記念事業「地球人大学院講座」が開催中のため、シンポジウムは無し。
97.12.06	**イヤーエンドシンポジウム&パーティー** シンポジューム：「パプアニューギニアの森と私たちの暮らし」
98.12.13	**イヤーエンドシンポジウム&パーティー** シンポジウム　アントン・ウィッキー氏　「街角・・・ジャパン・ウオッチング」
99.12.04	**イヤーエンドパーティー** 木場弘子氏（市内在住ニュースキャスター）のトークショー
00.12.06	**ミレニアム・イヤーエンドパーティー** 各委員会のパーフォーマンス紹介他
01.12.22	**協会設立１５周年記念アセアンフェアー　および　イヤーエンドパーティー** 1992 年から 8 回にわたって、招待されたアセアン 7 カ国 45 人の青年たちのその後の活躍とホストファミリーの交流を探って今後の活動に生かすことと、市民にアセアンを身近に感じてもらおうという趣旨。なお今回 45 人の青年たちに連絡したところ、16 人の青年から連絡があった。
02.12.01	**イヤーエンドパーティー** 東京音楽大学学長のトークと学生による薩摩琵琶とフルートの演奏
03.12.07	**イヤーエンドパーティー**　催し物　スコットランドに魅せられて
04.12.05	**イヤーエンドパーティー**　催し物　中国楽器が奏でる悠久のしらべ
05.12.03	**イヤーエンドパーティー**　催し物　トニー中村とステートサイダーズ
06.12.03	**年末交流会　UIFA２０周年記念講演会**　〔講師〕磯村　尚徳 氏

５　その他の活動

５．１　その他講演会

年　月　日	演　題　および　講　師
87.03.30	浦安市国際交流協会設立記念国際理解講演会。 「外から見た日本」上智大学教授　グレゴリー・クラーク氏
87.11.21	「アメリカ文化と日本」亀井俊介　東京大学教授
88.03.20	「現代アメリカのヒーローたち：ジョージア・オキーフとマリリン・モンローの作品と生き方」道下　筐子
88.05.12	小さな国際交流「あなたは何が話せますか」司会　新居加枝子　語学研修委員会　講師
88.05.15	「中国を知ろう」協力　高橋常虹、神谷ジュディ
88.05.26	ミニ講演会「私の暮らした異国ケニア」鈴木洋子
88.07.03	「英音法について」村越良人
88.07.04	「ことばの違いはちっともこわくない」渋谷区立長谷戸小学校　協力　帰国子女・語学研修委員会
88.07.08	ミニ講演会「子供たちにとっての国際化」住田千鶴子
88.07.14	「ぜいたくすぎる日本人　このままでは日本は飢える」森永和彦
88.09.11	「パレスチナ考」協力　フィラス・カシム
88.09.16	ミニ講演会「私の暮らした異国オーストラリア」松田桂子
88.09.22	「私の暮らした異国」渋谷区立長谷戸小学校　協力　帰国子女委員会
88.10.18	ミニ講演会「私の旅したインド」　村田美津子
88.11.06	「オランダと日本　狭い国の側面」エルブリッヒ・フェネマ　ジャーナリスト
88.12.01	ミニ講演会「私の暮らした異国アメリカ」司会　坪内恭子
89.01.20	ミニ講演会「私の旅したシルクロード」石川千恵子
89.02.25	「子供と家庭と社会と　ある作家の体験から」早乙女勝元　作家
89.03.10	ミニ講演会「私の暮らした異国パプア・ニューギニア」藤原春美
89.05.19	ミニ講演会「私の暮らした異国　トリニダード・トバゴ」森文子　帰国子女委員会　委員長
89.06.03	“England Now”アンドリュー・グリーン（英国出身）
89.07.23	ミニ講演会「帰国子女からのメッセージ」（高校、大学、社会人）司会　住田千鶴子
89.10.31	ミニ講演会「私の暮らした異国オランダ」西村由美　語学研修委員会委員長
90.01.21	姉妹都市提携記念講演会　「チターと私と国際交流」内藤敏子氏（チター奏者）
90.09.02	ミニ講演会「帰国子女からのメッセージ」パート２（中高生）　司会　森文子
90.10.27	英語による特別講座「岡本かの子の見たヨーロッパ」明治の女流作家岡本かの子の異文化体験を英語で紹介　講師　エーデット・コープマン
90.11.11	セミナー「外国から見た浦安の住まいと各国との比較」国際協力事業団研修生１４名
91.02.13	「英語を学ぶ楽しさと苦しさ」水之江有一　千葉大学教授
91.02.14	セミナー　「近くて遠い国、韓国との交流」徳田八郎衛　都市交流委員会委員長
91.06.22	英語による特別講座「トリニダッド　その文化と音楽」高橋アン　アメリカ人音楽家

91.10.26	英語による特別講座「Cross Cultural Communication」ユーディッド・スパルパース
91.11 月	**タイ文化セミナー講演会** 3 日「タイ美術の魅力とその世界」伊東照司氏 4 日「北タイの染色と伝統衣装」坂本真理氏 9 日「難民キャンプの子供たち・・・バンビナイキャンプのモン族」安井清子氏 10 日「タイの子供と教育」プラティーブ・ウイソンタン・秦氏
93.06.23	カンボジアの人々と暮らして」堀内紘子氏 カンボジアの難民キャンプで難民の言語教育・職業訓練をボランティアで実施。
93.11.27	韓国伝統宮廷料理の講習会 国際交流基金が実施している「外国文化紹介事業」の一環として、大韓民国より招待した重要無形文化財の黄慧性先生による韓国伝統宮廷料理の実習および韓国食文化についての講演。今回はＵＩＦＡ協賛によりおこなわれたもの。
94.02.26	「ＡＥＴの先生を囲んで」 ＡＥＴとはアシスタント・イングリシュ・ティーチャーの略称で公立中学校において日本人英語教師と協力して英語の授業を担当・補助します。浦安市では、1979 年から独自のＡＥＴプログラムシステムを持っていたが、5 年前（89 年）からは姉妹都市提携を結んだオーランド市からＡＥＴの派遣を受けています。
95.01.29	「ホンネで生かす在住外国人」 講師　本田　博氏（日本エネルギー経済研究所国際協力プロジェクト部）
95.02.18	「韓国と日本の文化比較」　具　見書氏（ハングル講師、東京大学大学院在学中）
95.04.15	「韓国と日本の文化比較パートⅡ」女性の目から見た文化の違い。 姜　慶愛氏　日本人と結婚、3 人の母親、会社経営
95.07.18	講演会　「海外家庭教育その後・・」 講師　海外生活アドバイザー　樋口容視子氏
1996	**10 周年事業シンポジウム「地球人大学院講座」を 5 回に亘り開催。** 第 1 回『意外と知られていないアジアの素顔』。第 2 回　9 月 14 日『アジアの国をもっと知ろうよ』。第 3 回　11 月 9 日『変わりゆくアジアとその背景』。第 4 回　1 月 11 日『日本の安全保障を考える』。第 5 回 3 月 8 日『西洋から見たアジア』
96.11.16	「戦前、戦後、中国に生きるアジアの女性たち」 バン・ツオンイ氏　中国撫順市出身　フリーライター
97.06.28	国際化セミナーin 浦安　外務省、ＵＦＲＡ、浦安市と共催し、21 世紀に向けて地域の国際化のあり方について考えた。 基調講演：「国際問題が国内に与える影響」堀江良一　外務省国内広報課長 第一分科会　姉妹都市交流から地球市民交流へ 第二分科会　地球でできる国際交流 第三分科会　内なる国際化 第四分科会　多文化共生への取り組み
97.10.04	「アジア民族服飾の旅」道明三保子
97.11.01	英語による特別講座「In the light of Rembrandt」ロンネケ・デラマー（オランダ人）

97.11.23	「ニューヨーク滞在記」パート２　浜地道夫
98.11.15	特別講座「中国古典芸術鑑賞」 第1部　　台北の故宮博物館の文物をスライドで紹介　講師　邱秀慧 氏、東京在住、芸術雑誌「Art China」駐日特約記者 第２部　中国民俗音楽の解説と演奏　揚桂香氏
99.02.06	「EIGO　DE　RAKUGO」・・日本人のユーモアのセンス紹介 大島希巳江　明海大学非常勤講師
99.10.30	「ベチャから眺めたインドネシア」佐々木　宏一　語学研修委員会
00.10.08	「日本の音色を聞こう会」地唄、雅楽、篠笛、三線の演奏
00.10.22	「知られざるイタリア探訪」伊藤　進　語学研修委員会イタリア語講師
01.06.24	「台湾（台南）を知ろう」謝雅梅女史　評論家
01.07.07	「外交の窓」講演会およびシンポジューム
01.10.06	古典文化紹介「狂言の会」
01.12.01	「南太平洋の佳境　ニュージーランド紹介」白竹昭、ポーラ・ハンセン、岡本靖子
01.12.15	「岐路に立つかアメリカ経済」新居嗣朗　語学研修委員会時事英語講師
02.02.24	青年海外協力隊OB（浦安在住）のシンポジューム
02.03.18	ミニレクチャー「南アフリカの魅力を知ろう」
02.07.07	ミニセミナー「日韓交流促進のための勉強会」 「日韓文化交流について」韓国大使館　金鐘浩書記官
02.08.18	「玉明民族楽団」の演奏会　　中国古典楽器による曲目演奏
02.12.01	「日本開国の水先案内人となった漂流民」　山内　孝　語学研修委員会
03.03.08	第２回「狂言の会」
03.06.21	「曲がり角に来た姉妹都市交流」毛受敏浩講師
03.10.05	「トルコの見方」西脇　保幸　横浜国大教授、浦安在住
04.11.03	「韓国。遠い国？近い国？」金　東俊氏　神田外国語大学名誉教授
05.01	能楽への誘い
05.10.30	「ドイツの戦後60年」　ゲプハルト・ヒールシャー　ドイツ人ジャーナリスト
06.01.14	「古典落語に触れてみよう」　学習院大学落研一同
06.04.23	「バングラデシュを知っていますか」 ムンシ・カリルラ・アザド氏　ＪＩＣＡ青年海外協力隊訓練所　ベンガル語講師

５．２　　ホームステイの記録

1987	11 月 23 日	**初のホームビジット受け入れ** JICA 住環境研修生１２名のホームビジットを受け入れた
1987	12 月 5 日～６日	**初のホームステイ受け入れ** 外務省招聘日本語研修生８名のホームステイを受け入れた
1988	２月 19 日～21 日	アジア学生文化協会が受け入れた漁業研修生 13 名のホームステイを受け入れた
	4 月 24 日	エルダーホステラーと市民のふれあい（文化会館　30 名）
	8 月 24 日～25 日	オックスフォード大学演劇クラブ員 11 名ホームステイ受け入れ（学生委員会）
	９月３日～４日	国際交流基金主催海外日本語研修優秀者研修プログラム参加者　１３人 ホームステイ受け入れ
	88.10.10	ホストファミリー登録家庭懇談会　３９人
	11 月 5 日～6 日	アジア太平洋地域外交官 10 名ホームステイ受け入れ。
	11 月 25 日～27 日	ＪＩＣＡ住宅研修生 15 名ホームステイ受け入れ。以後年 2 回程度受け入れが始まった。
1989	２月９日～10 日	ＪＩＣＡ住環境セミナー研修生　１１名
1989	5 月 20 日～21 日	ミシガン州立大学学生ホームステイ（学生 9 名、教授 2 名）
	8 月 6 日～26 日	**初めての長期ステイ**として、フランス　モレル市民グループ 18 人、３週間のホームステイを受け入れた。
	10 月２２日	エルダーホステラーホームビジット受け入れ（10 名） その後、95 年度までは年間数回の定期的受け入れを実施した。
1990	6 月 7 日～7 月 4 日	**オーランド市ドクターフィリップス高校生ホームステイ受け入れ** 浦安市では、姉妹都市交流事業の 1 つとして毎年中学生高校生をオーランド市に派遣していましたが、その受け入れを一手に引き受けているのがＤｒ．フィリップス高校です。そのため、同校と浦安市の間には深いつながりができています。 先生 1 名と生徒 5 人が 27 日間滞在し、市民と交流（学生委員会）
	7 月 15 日	国際教育学院留学生 30 名　日本文化紹介およびホームビジット。この後年 2 回の定期的来訪が続いた。（ホームステイ・ビジット委員会、比較文化研究委員会、在住外国人交流委員会）
	8 月 18 日～9 月 5 日	アイセック（国際経済商学学生協会）主催「地球未来会議参加者」9 名のホームステイ受け入れ。
1992	1 月 5 日～26 日	**オーストラリア　マッコリー大学の日本語学科生と語学講師あわせて５名のホームステイを受け入れた。**“日本に滞在することにより、日本の文化に触れ、生きた日本語を実践し、より深く日本を理解したい”との強い要望をＵＩＦＡが受けたもの。

	10月11日	エルダーホステラー・ホームビジット&ふれあいミーティング
1993	１月４日～２４日	マッコリー大学生ホームステイ
	4月13日	エルダーホステラーのホームビジット27名
	6月10日～20日	ドクターフィリップス高校生20名ホームステイ受け入れ
	10月16日	エルダーホステラー40名受け入れ
1995	1月5日～26日	マッコリー大学生のホームステイ　6名
	11月21日～27日	ドクターフィリップス高校生浦安訪問　生徒10名、教師3名 UIFA主体で受け入れ
1996	1月5日～26日	マッコリー大学ホームステイ受け入れ
1997	1月5日～25日	マッコリー大学ホームステイ受け入れ
	7月4日～10日	オーストラリアAnglican Boys Grammar高校生9名、教師2名ホームステイ
	9月7日～25日	オランダエラスムス大学生4人　長期ホームステイ
1998	1月5日～25日	マッコリー大学ホームステイ受け入れ（3名）
1999	1月5日～25日	マッコリー大学ホームステイ受け入れ（5名）
2000	10月27日～11月1日	マレイシア日本語協会員の来訪　同協会代表エドワード・リー氏を団長に日本語を学ぶ青年15名の浦安訪問。ホームステイ
2001	1月11日～21日	マッコリー大学ホームステイ（1名）
	10月3日～8日	ホームステイ in マレイシア 5名の市民がマレイシアの家庭にホームステイ
2002	3月9日～13日	ユースアンバサダーのホームステイ
2002	9月9日～	エラスムス大学生（1名）ホームステイ
2002	10月26日～11月3日	マレイシア日本語協会生の受け入れ　17名
2003	1月10日～20日	マッコリー大学生1名ホームステイ
2004	4月15日～17日	ニュージーランド　クライスト・チャーチ高校生10名ホームステイ

2004	9 月 18 日～20 日	ＪＩＣＡ青年事業招聘地方プログラムでマレイシア青年 22 名ホームステイ
2005	5 月 28 日～30 日	ＪＩＣＡ青年事業招聘地方プログラムでフィリピン青年 23 名ホームステイ
2006	7 月 22 日～24 日	ＪＩＣＡ青年事業招聘地方プログラムでバングラデシュ青年 15 名ホームステイ
2007	11 月 19 日～25 日	ドクターフィリップス高校生浦安訪問　生徒 30 名、教師 3 名、教委の呼びかけた家庭で生徒 24 名受け入れ。UIFA は生徒 6 名、教師 3 名を受け入れ

５．３　　他の協会訪問等の記録

会長　徳田八郎衛

（1）　武蔵野市国際交流協会

姉妹都市交流に携わってきた関係で、日帰りで訪問できる範囲にある近隣都市の協会を姉妹都市交流委員とともに時々訪問し、姉妹都市交流活性化について意見を交換しました。最初に訪問したのは 1990 年２月、武蔵野市国際交流協会でした。６名で訪問しました。ルーマニアのブラショフ市に縁のある会員が中心となり、同市の日本文化研究者への和書贈呈や招へいにより遠い日本への関心を深めてもらうとともに、武蔵野市民にも「さほど知られていないルーマニア」を紹介するのが主な活動でした。同市とは姉妹都市提携しないままですが、1999 年には現地に日本ムサシノ交流センターを設立したそうです。後に浦安でも、姉妹都市オーランドとは別に台南市を友好都市として交流したいという意見が台頭したので、「武蔵野市を見学して交流方法を学んでみては？」と助言しましたが、残念ながら誰も訪問しなかったもようです。

（2）　浜松国際交流協会（HICE）

不法滞在も含めると３万人にのぼる外国人のために何かしてやろう、という趣旨で結成された HICE を 1992 年３月、11 名で訪問しました。彼らの出身地から首長が続々来訪するので特定の都市と姉妹都市提携はできないとする HICE。UIFA のような委員会は設けず行事には全員で取り組む HICE。色々のことを学んだ後、ブラジルフェスタを拝見しました。

（3）　習志野市国際交流協会（NIA）

津田沼駅前の習志野市産業祭会場でブース設営に励む NIA 会員に面会したのは、1994 年７月でした。３名で訪問しました。ブースでは NIA 活動全般ではなく、姉妹都市である米ニューメキシコ州タスカルーサの紹介とアラバマ大学グッズの販売に集中する由。ブース設営に励んでいるのは NIA の中の産業観光部会でした。

（4） 館山市国際交流協会(TIES)

UIFA に類似の各機能を代表する役員、市職員でない事務局長、そして都市交流委員の皆さんと懇談したのは1996 年３月、13 名が訪問しました。まず比較文化、言語学習といった各機能は TIES 結成前から活動していたと聞いて感心し、また 1957 年から続いてきた米ワシントン州ベリンハムとの姉妹都市交流も一時は停滞していたが、「英語が話せなくても仲良くなれるスポーツ交流」、それもスキー、水泳、テニスなど幅広い種目で展開することにより活性化したという説明にまた感心しました。ベリンハム市との電子メール交流も推進しているが、ついて来る会員はまだ少数とのことです。

（5） 近隣 10 協会が集まる交流会

90 年代には浦安、市川、船橋、習志野各市の交流協会が年度末に回りもちで連絡会を催していましたが、話題は活動全般にわたっていました。そこで 1997 年２月の連絡会では姉妹都市活動に話題を絞ってみるよう提案したところ、参加希望の協会が続出しました。すなわち市川市、船橋市、習志野市、松戸市、鎌ヶ谷市、我孫子市、武蔵野市、国分寺市、浦安市各国際交流協会および江戸川ホームステイクラブです。WAVE101 小ホールで開催し、来訪者 22 名、UIFA 出席者 26 名の立派な交流会となりましたが、逆に発表・討議時間は不十分なものとなりました。

（6） 第１回国際交流協力実践者全国会議 2003

全国の国際交流活動家が一同に会して討議する場として有名なのは「箱根会議」です。揺籃期の UIFA からも何名か参加されました。2003 年８月に JICA 東京国際センターで開催される、この実践者全国会議に日本国際交流センター勤務の毛受敏浩さんからお誘いを受けた際も、箱根会議の延長だろうと早合点したのですが、10 年以上経つと中身は大違いでした。まず参加者の大半が、県や都市の国際交流協会専従者でした。そして討議事項も、「どうやって学校と連携するか」「どうやって地域行政と連携するか」「どうやって NGO や政府機関と連携するか」等々です。要するに「どうやって資金を集め、生き抜くか」のノウハウ検討であり、模擬店や語学講座でセッセと稼ぐ話が次々と伝授されました。

自治体からの助成金が大幅に削減され、東京、千葉、青森の国際交流協会が解散され、目的を絞った NGO や NPO が台頭してくるという厳しい情勢を全員が感じていたはずですが、冒頭に司会者が「何も手を打たなければ５年以内に自分の協会が消滅するかもしれないという危機感をお持ちの方は挙手願います」と問いかけ、これに応じたのはわずか４名でしたが、その後間もなく、文京区の協会も解散しました。

（7） 第３回国際交流協力実践者全国会議 2005

これも第１回、第２回全国会議と同じ内容のものでしたが、新潟中越地震で長岡市および各地の協会が連携して在住外国人の支援に成果を挙げた事例報告が目立ちました。面白かったのは「近隣の協会間での交流も大切だが、関東全域が壊滅するような事態では、遠方との交流も重要である」という教訓です。また多言語サービスには「協会だけの力でなく、JICA の OB 会など、様々な国際交流・協力団体とふだんから接触しておいて力を借りる」という助言も有益でした。現在、UIFA に欠けている事項でもあります。

編集後記

2006 年の 6 月に徳田会長から 20 周年記念事業基本構想が発表され、その記念事業のひとつとして 20 周年記念誌の刊行が計画されました。当初は 2007 年 3 月までに完成し、協会会員に配布したいとの計画でスタートしたものの、遅れに遅れてようやく本日皆さんに配布できるようになりました。

協会の 5 周年、10 周年にそれぞれ記念誌が発行されていますが、今回の編集で特に考慮したことは、この 20 年間の歴史を記録として残したいということでした。そのために今回はあえて、「UIFA 5 年間のあゆみ」、「UIFA10 年間のあゆみ」で取り上げられた内容も含めて歴史書を作る気持ちでまとめることにしました。

このため年表を重視し、できる限り、何が、いつ、誰によって行われたかということを記録することにしました。

ただ、本誌では内容についての詳細まで記録することはあまりにも膨大な作業になると判断し、協会創立以来 20 年間、変わらずに発行し続けた「協会ニュース」で対処することにしました。

幸いすべての協会ニュースが散逸することなく残っていましたので、総務研修部会でこれらをすべて電子データに変換し本誌の**付録**として皆様に提供することができました。

最後に本誌編集にあたり、大変おいそがしい中、協会の設立から、組織変更にいたる経緯について対談をしていただいた、辻村聖子 元浦安市国際交流課長、藤岡順次 元会長および寄稿していただいた和田真 元浦安市文化国際課長、そしてＪＩＣＡ青年招聘事業について詳細に執筆していただいた竹中睦裕 前会長、また日本語ボランティアの揺籃期についてお伝えいただいた梅原祥子 元副会長、委員会活動から部会活動への変遷の経緯についてご報告いただいた宮沢君子　元副会長、ならびにご協力いただいた各部会の皆様方に心からお礼を申し上げます。

（本誌編集委員　三浦　紘二）

編集発行：浦安市国際交流協会　２０周年記念誌編集委員
協会ニュース CD ROM 編集：総務研修部会

U.I.F.A.